秋田県文化財調査報告書第264集

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

― 大平遺跡 ―

1996・3

秋田県教育委員会

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

― 大平（おおひら）遺跡 ―

1996・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これらの文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局秋田工事事務所により、秋田市上北手から昭和町豊川に至る秋田外環状道路建設事業が計画されました。この路線の北、昭和ＩＣとなる場所に周知の遺跡である大平遺跡がかかっており、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、奈良時代の竪穴住居跡や炭焼窯跡などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの成果をまとめたものでありますが、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、建設省東北地方建設局秋田工事事務所、秋田市教育委員会、昭和町教育委員会ならびに地域住民の皆様など、調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成８年３月25日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　言

1．本報告書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った秋田外環状道路建設事業に係る大平（おおひら）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆・編集は、伊藤攻が行い、庄内昭男が加筆・校閲した。

3．考古地磁気による年代測定は、秋田大学西谷忠師氏のご厚意により調査していただき、結果を本報告書25頁に掲載した。

4．放射性炭素の年代測定は、学習院大学に依頼し、結果を本報告書30頁に掲載した。

5．炭化材の樹種同定は、古環境研究所に依頼し、結果を本報告書31頁に掲載した。

6．本報告書に掲載した２万５千分の１・５万分の１の地形図は、建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。

7．遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原著『新版　標準土色帖』（1973）を使用した。

凡　例

1．本報告書の挿図ならびに図版は、次の要項に従って作成されている。

1）遺構の記述について

遺構実測図は、構成上不定縮尺である。

遺構実測図の中の矢印は、国家座標第Ｘ系座標北をしめす。

住居跡・炭焼窯跡・土坑については、（　）内が現場での注記番号であり、本書では新たな番号をつけて編集した。

2）遺物の記述について

本報告書に掲載した遺物は、発掘調査によって得た資料のすべてではない。

実測図は次の縮尺に統一してある。

［土器］土器拓影：1／3

［石器］石鏃・石匙・剥片石器：1／2

写真図版の縮尺は、実測図と同じである。

目　次

序　i
例言・凡例　ii
目次・挿図目次・図版目次　iii・iv

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査要項 …… 1

第2章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第1節　遺跡の位置と周辺地形 …… 2
　第2節　周辺の遺跡 …… 3

第3章　発掘調査の概要 …… 6
　第1節　遺跡の概観 …… 6
　第2節　調査の方法 …… 6
　第3節　調査日誌 …… 9

第4章　調査の記録 …… 10
　第1節　調査区の地形と層位 …… 10
　第2節　検出遺構と出土遺物 …… 10

第5章　自然科学分析 …… 25
　第1節　考古地磁気調査 …… 25
　第2節　放射性炭素年代測定 …… 30
　第3節　炭化材の樹種同定 …… 31

第6章　まとめ …… 34

挿図目次

第１図　地形分類
第２図　周辺の遺跡
第３図　遺跡の位置及び関連遺跡
第４図　調査前の地形及びグリット配置
第５図　遺構位置
第６図　基本土層
第７図　第１号竪穴住居跡
第８図　第１号竪穴住居跡内遺物出土状況
第９図　第１号竪穴住居跡内出土遺物（１）
第10図　第１号竪穴住居跡内出土遺物（２）
第11図　第１号炭焼窯跡
第12図　第２号炭焼窯跡
第13図　第２号炭焼窯跡における炭化材検出状況
第14図　第１号土坑、第２号土坑、第３号土坑
第15図　遺構外出土土器
第16図　遺構外出土石器

図版目次

図版１　調査前遺跡全景（南西→北東）
調査前遺跡全景（南→北）
図版２　調査前遺跡全景（南→北）
調査後遺跡全景（東→西）
図版３　第１号竪穴住居跡完掘状況（南→北）
第１号竪穴住居跡断面（西→東）
第１号竪穴住居跡断面（北→南）
図版４　第１号竪穴住居跡（西→東）
第１号竪穴住居跡遺物出土状況（南→北）
須恵器出土状況
図版５　第１号炭焼窯跡完掘状況（南西→北東）
第１号炭焼窯跡焚口付近
第１号炭焼窯跡煙出し付近
図版６　第２号炭焼窯跡完掘状況（南東→北西）
第２号炭焼窯跡炭化材出土状況（北東→南西）
図版７　第２号炭焼窯跡焚口付近縦断面（南西→北東）
第２号炭焼窯跡窯体中央部縦断面（南西→北東）
第２号炭焼窯跡窯体中央部横断面（南東→北西）
図版８　第１号土坑完掘状況（南→北）
第２号土坑完掘状況（南→北）
第３号土坑完掘状況（南→北）
図版９　第１号竪穴住居跡内出土遺物
図版10　第１号竪穴住居跡内出土遺物
遺構外出土石器

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

秋田外環状道路は、秋田市内の交通混雑の解消をはじめ、交通量の増加にともなう国道沿線の生活環境の改善等を目的として、建設省東北地方建設局秋田工事事務所から計画が提出されたものである。

昭和61年４月には、秋田市上北手古野から昭和町豊川龍毛にかけて26.2kmの路線が決定された。その路線決定にしたがって秋田県教育委員会では、ルート上での遺跡分布調査および範囲確認調査を継続的に行い、その結果６ケ所の遺跡を確認した。

本報告書にとりあげる大平遺跡は、秋田市北部で確認された遺跡で、平成元年に範囲確認調査を実施し、11,500㎡の範囲を確定した。平成６年に遺跡の範囲のうち工事にかかる西端部分1,300㎡を発掘調査したものである。

第２節　調査要項

１ 遺　跡　名	大平遺跡　※遺跡記号５０Ｈ
２ 所　在　地	秋田県秋田市金足岩瀬字松館大平28－3外
３ 遺 跡 状 況	山林
４ 調査対象面積	1,300㎡
５ 調 査 面 積	950㎡
６ 遺 跡 性 格	竪穴住居跡、炭焼窯跡、遺物散布地
７ 遺 跡 時 期	縄文時代、古代
８ 調 査 目 的	秋田外環状道路建設事業に係る事前調査
９ 調 査 期 間	平成６年５月11日～６月24日
10 調査主体者	秋田県教育委員会
11 調　査　員	庄内 昭男（秋田県埋蔵文化財センター調査課長補佐）
	伊藤　攻（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
12 調査総務担当	藤肥良清（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤広文（秋田県埋蔵文化財センター総務課主任）
	須田輝樹（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
13 調査協力機関	建設省東北地方建設局秋田工事事務所
	秋田市教育委員会、昭和町教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と周辺地形

大平遺跡は東経140°2′27″・北緯39°51′20″にあたる。

大平遺跡の位置する日本海に沿った秋田県中央部の地形をみると、八郎潟周辺低地・標高100ｍ前後の丘陵地・標高200ｍ以上の山地に分けられる（国土調査　秋田県：1973）。

遺跡のある丘陵地から望むと、南東部には海岸に沿ってほぼ平行に標高20ｍ前後の海岸砂丘が発達しており、その内側に海抜10ｍ以下の八郎潟干拓低地が開けている。東には標高50～100ｍの丘陵地が南北に発達し、丘陵地のさらに東には、本地域の最高点である721.5ｍの俎山を主峰とする火山岩地が南北に走っている。その山地および丘陵地に源を発する鯉川・馬場目川・井川・豊川および馬踏川の５河川はすべて八郎潟に注いでいる。

大平遺跡は、標高50ｍの丘陵地先端に位置し、南に約0.5㎞離れて馬踏川、北に約1.5㎞離れて豊川が流れている。

F：扇状地　P：谷底平野　Hs：丘陵地　NI：自然堤防及び砂堆　　1：50,000

第１図　地形分類

第２節　周辺の遺跡

ここでは、大平遺跡の歴史的環境を理解するために、秋田平野北部と東部丘陵地、八郎潟南東部の豊川・馬踏川流域の遺跡について概観したい。なお遺跡の性格から秋田城跡と古代の生産遺跡について詳述した。

第２図と第３図は、秋田県遺跡地図（秋田県教委：1990)、遺跡詳細分布調査報告書（秋田市教育委員会：1989）に基づいて作成したものである。

縄文時代の遺跡

いずれも縄文土器および石器の散布地として知られている。豊川流域の北岸に松葉沢（１)、西野（２)、千刈田（３)、塩辛田（４）がある。豊川および馬踏川にはさまれた舌状台地先端には元木山Ⅰ・Ⅱ（５・６）があり、その東側豊川油田周辺にも、鳥巻Ⅰ・Ⅱ（７・８)、上松館（９)、真形尻（10)、草土沢（11）があり、豊川油田の南西端部に1989年秋田外環状道路建設事業に係わる事前調査で発掘された大沢（12）遺跡がある。また、明治時代にナウマン象などの骨が発見され、天然アスファルトの産地として有名な槻木遺跡群は当遺跡より南東1.2㎞のところにある。

弥生時代の遺跡

現在のところ確認されていない。

古代の遺跡

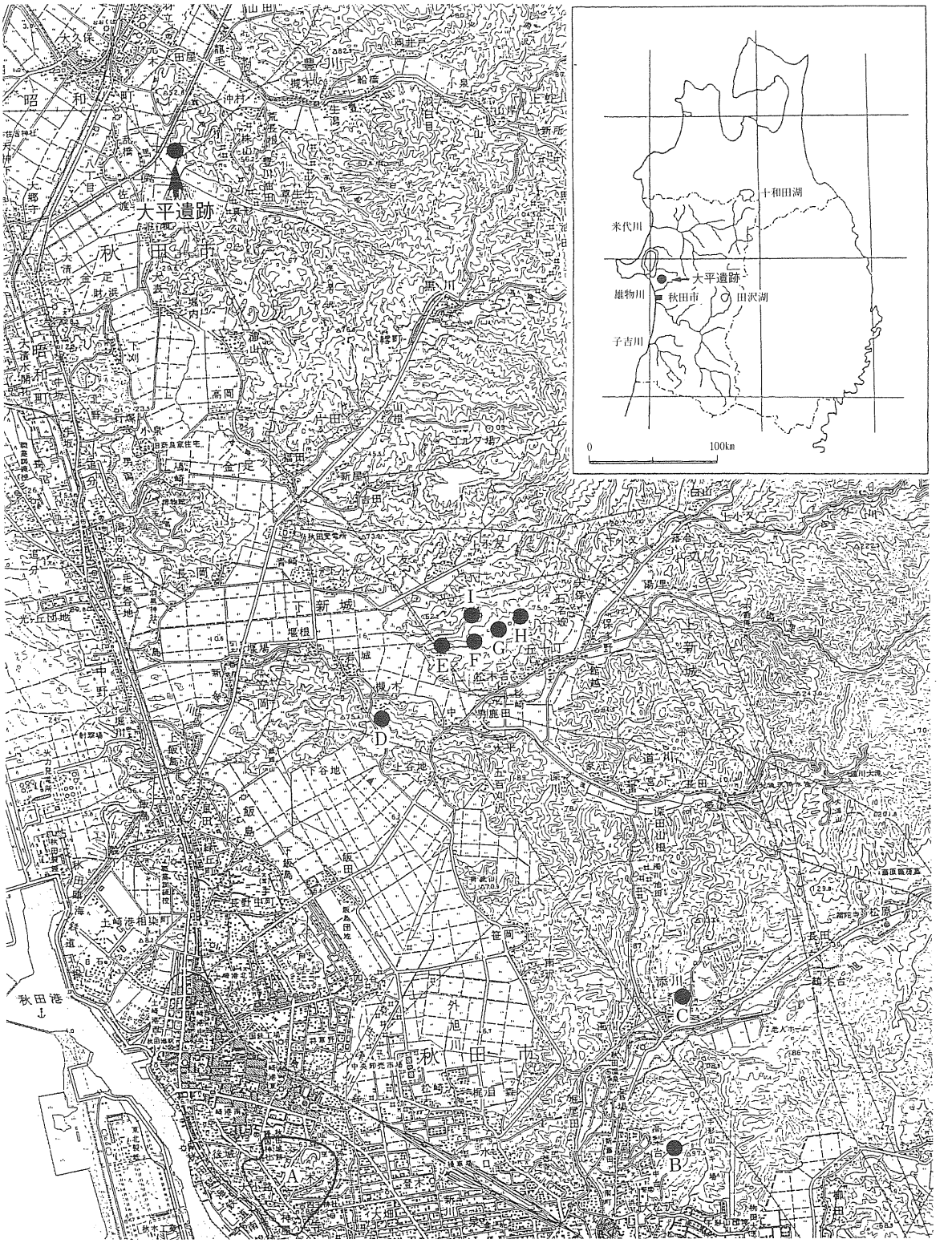
大平遺跡から約13㎞南には国指定史跡秋田城跡（Ａ）があり、秋田城跡の東側に広がる丘陵地には、須恵器・窯壁等の採集によって確認されている窯跡がある。手形山丘陵地には手形山窯跡（Ｂ)、古城廻窯跡（Ｃ）があり、北東の上新城丘陵地には右馬之丞窯跡（Ｄ)、谷地遺跡（Ｅ)、大沢窯跡Ⅰ（Ｆ)、大沢窯跡Ⅱ（Ｇ)、小林窯跡（Ｈ)、県指定史跡五十丁窯跡群＝末沢窯跡群＝がある。手形山窯跡は1974年に秋田考古学協会によって発掘調査が行われ、８世紀末から９世紀にかけての須恵器窯跡が２基検出されている。古城廻窯跡は秋田市史編纂室が1993年に調査を行い、須恵器および瓦を焼成した窯跡１基を検出している。大平遺跡のある豊川丘陵地には生産関連の遺跡として確認されているものがなく、土師器・須恵器の散布地として知られている遺跡がある。豊川流域の北岸台地上には、西野（２)、千刈田（３)、深田沢（13)、塔田Ⅰ～Ⅲ（14～16）といった遺跡群がある。さらに南岸台地には、正戸尻Ⅰ・Ⅱ（17・18)、白寸沢（19)、高野（20）といった遺跡がある。秋田市岩瀬地区馬踏川北岸には、前山Ⅰ・Ⅱ（21・22)、草生土沢（23)、北田（24)、大表（25)、大沢（12）の各遺跡がある。また1990年秋田外環状道路建設事業に係る事前調査で発掘された松館（35）遺跡では火葬墓群が検出されている。

中世の遺跡

『秋田県の中世城館』には、山田館（26）、極楽館（27）、元木館（28）オオサカ館（29）、槐館（30）、岩瀬館（31）、真形館（32）、よもみ館（33）がとりあげられている。

第２図　周辺の遺跡分布

1：25,000



第３図　遺跡位置及び関連遺跡　　1：50,000

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

大平遺跡は、秋田市金足岩瀬字松館大平28－3外に所在する遺跡である。秋田市黒川から北西にのびる昭和町元木山を北西端とする豊川丘陵の西の一角にあり、八郎潟に向かって南西に張り出す舌状台地西端に位置している。遺跡の立地する丘陵部分の標高は19～30ｍで、周辺低地との比高差は15～25ｍである。遺跡から80ｍ程離れた西側を国道７号線が走り、北に2.5㎞の所にＪＲ大久保駅がある。

遺跡の現況は松林である。かつて地形の改変が次の２件により行われている。南縁の丘陵裾部を横切ってトロッコ道が敷設されたこと、南西から西側にかけて大きく土取りされ、急斜面となっていることである。したがって1990年に発掘調査が行われた松館遺跡とは丘陵地として地続きであったとみられる。

第２節　調査の方法

１．調査区の設定

調査を計画的に進めるために調査対象区に一区画４×４ｍのグリッドを設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭№465を原点として国家座標第Ｘ系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Ｙ軸とし、これに直行するラインを東西基線Ｘ軸とした。基準交点№465をＭＡ30とし、Ｙ軸に２桁の算用数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

２．発掘方法および記録作成

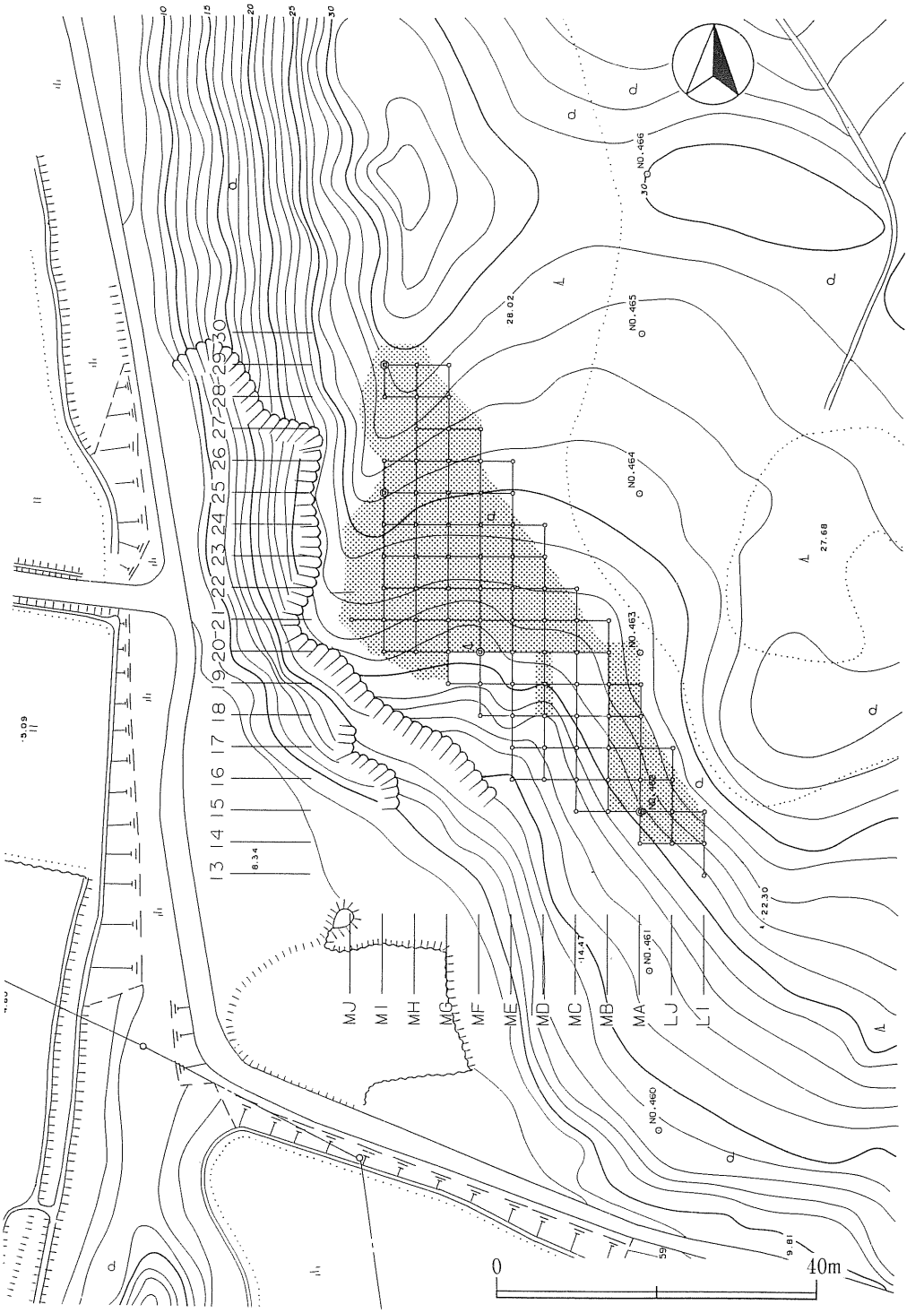
北側頂部からはじめて南側下部へ調査を進めていった。ほとんどは地山の褐色土層で遺構確認を行った。遺物は表土から地山まで掘り下げる間に出土したものをとりあげた。

＜遺物の記録＞遺物の記録作成・取り上げは次の方法で行った。南東隅の杭を基準としてグリッド内における位置を記録し、遺跡内における遺物番号を付して取り上げた。

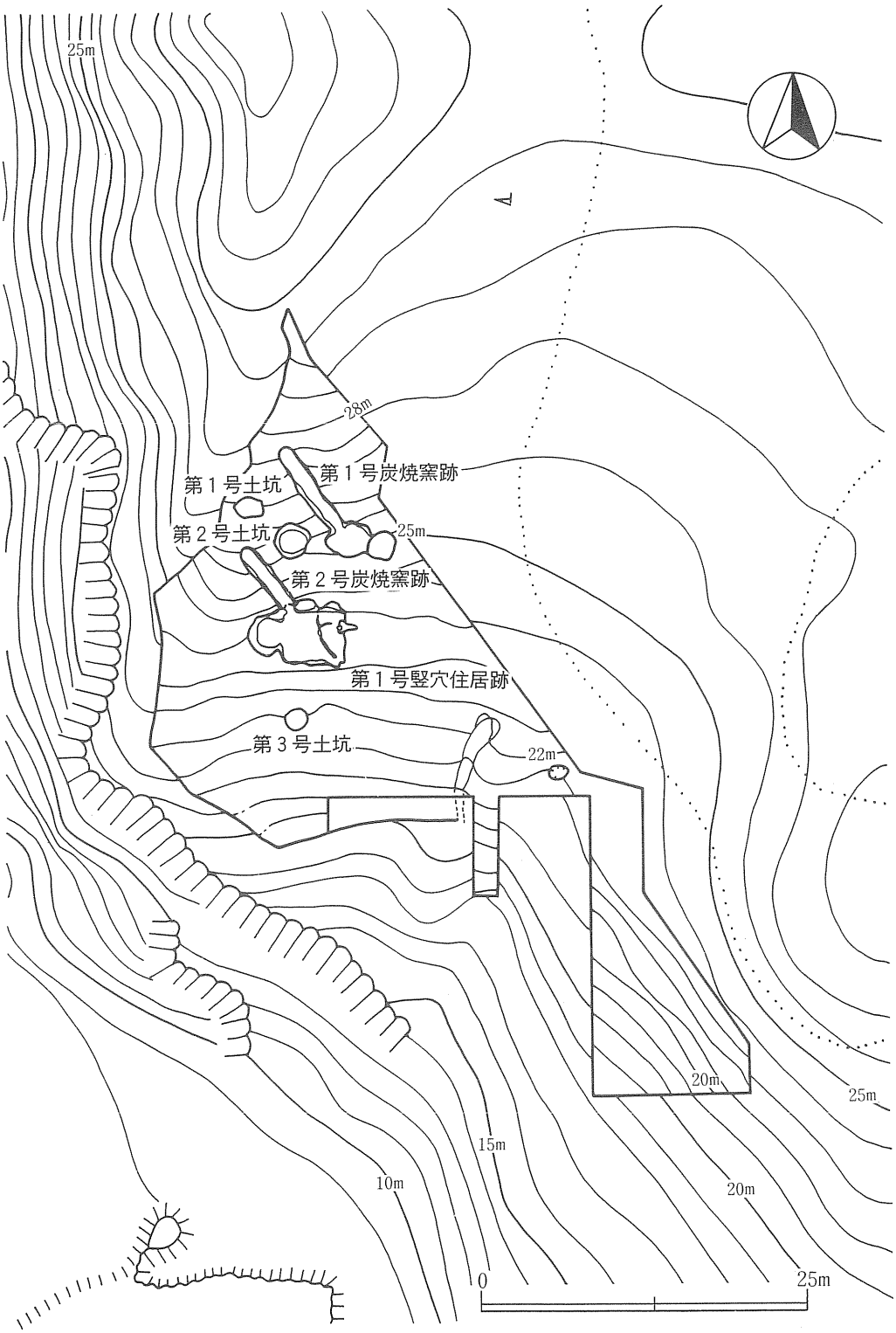
＜実測図の作成＞精査した遺構は、調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易な遣り方測量によって図面を作成した。遺構の平面図・断面図は、1／10・1／20の縮尺で作成した。

遺跡全体の土層図は、南北ＭＧ、ＭＤラインを延長して作成した。土層図は1／20の縮尺で作成し、色調・かたさ等の特徴を記載した。

＜写　真＞現場の写真は35㎜判のカメラを用い、広角・標準レンズを適宜使用した。現場撮影用のフィルムはモノクロ、およびカラーリバーサルの２種類を使用した。遺物の写真撮影は35㎜判のカメラを使用し、モノクロで行った。



第4図　調査前の地形及びグリッド配置


25m
28m
第１号土坑
第１号炭焼窯跡
第２号土坑
25m
第２号炭焼窯跡
第１号竪穴住居跡
第３号土坑
22m
20m
25m
15m
10m
20m
0
25m

第５図　遺構位置

３．遺物整理の方法

＜遺物の整理＞遺物は土師器・須恵器と数片の縄文土器が出土した。55×34×15cmのコンテナで４箱である。遺物のほとんどが土師器であり、石製品は剥片石器と石器素材・礫石器である。

これらの遺物を洗浄し、接合作業を行った。石器と土器には、グリッド名・層位・出土年月日を注記した。

＜土器・石器の実測図作成＞主な土器破片の拓影をとり復元図を作成する。石器はすべて1／1で図化した。

第３節　調 査 日 誌

５月10日　機材の搬入と倒木及び雑木の除去を行う。南側斜面下を排土置き場としてベルトコンベアを配置する。

５月11日　遺跡を南北に縦断するＭＧ，ＭＤラインにそって土層観察用トレンチを掘る。ＭＧライン西側北端のＭＨ28グリッドより、表土除去を開始した。同時に調査前の遺跡遠景を撮影する。

５月17日　４カ所で遺構の存在を確認する。ＭＦ22グリッドの地山面で須恵器杯が出土した。

５月18日　遺構は、２基の登窯跡と３基の土坑であることを確認する。

５月19日　土層観察用ベルトの土層図を作成する。ＭＧライン東側の表土除去を開始する。

５月23日　各遺構の掘り下げと精査を行い、同時に図化を始める。

５月30日　精査の結果、登窯跡は炭焼窯跡と判明する。

６月 3日　第１号炭焼窯跡の全景写真撮影。

６月 8日　第２号炭焼窯跡の炭溜りを掘り下げる。地山土塊の下の暗褐色土中より、土師器が多数出土する。

６月 9日　土師器が多数出土した東側でカマドを検出し、住居跡と確認する。第２号炭焼窯跡の前庭部も含め、床面を精査する。

６月10日　第２号炭焼窯跡の全景写真撮影。

６月16日　炭焼窯跡の燃焼部、煙道部の断ち割りを行う。

６月17日　住居跡の精査、カマドの断ち割りを行う。

６月22日　ベルトコンベアを調査区域外に移動する。調査終了後の全景写真撮影を行う。

６月23日　遺構図面及び調査後の地形図作成終了。

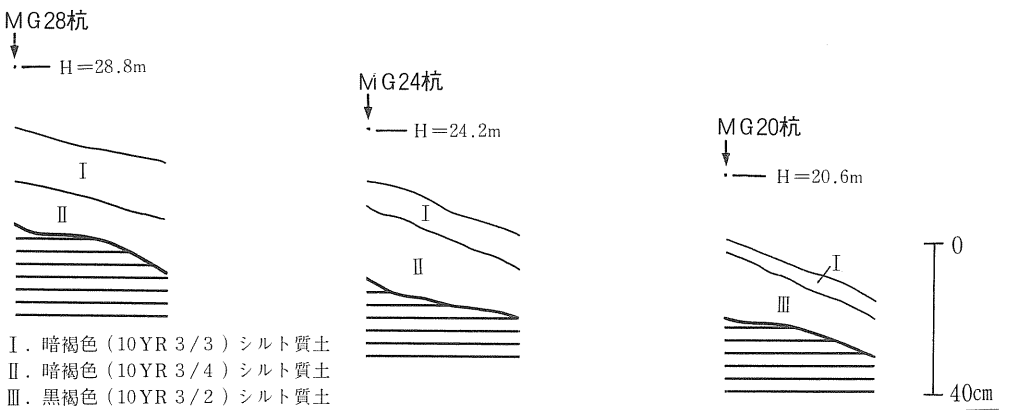
６月24日　機材搬出、プレハブ解体、調査終了。

第４章　調査の記録

第１節　調査区の地形と層位

遺跡のある台地の地形をみると、北東側は急斜面で丘陵頂部に連続し、北側及び西側は急勾配の斜面で、南側は緩やかな斜面となっている。西側と北及び南東側は相対的に高位部で中央は南西に向かって開く谷地形となっている。西側の高位部から南側の谷部にかけてが、今年度の調査区である。

遺跡の層位は、調査範囲が比較的急な斜面であるためⅠ層；表土の暗褐色シルト質土、Ⅱ層；暗褐色シルト質土が地山の遺構確認面である黄褐色シルト粘土質土の上に堆積している。



第６図　基本土層

第２節　検出遺構と出土遺物

調査区内で検出した遺構は、斜面上位で炭焼窯跡２基、斜面中腹で竪穴住居跡１軒、炭焼窯跡と住居跡の周囲で土坑３基を検出した。土師器・須恵器の遺物は竪穴住居跡とその周辺より出土した。その他に、斜面上位で縄文土器片及び石器素材が出土している。

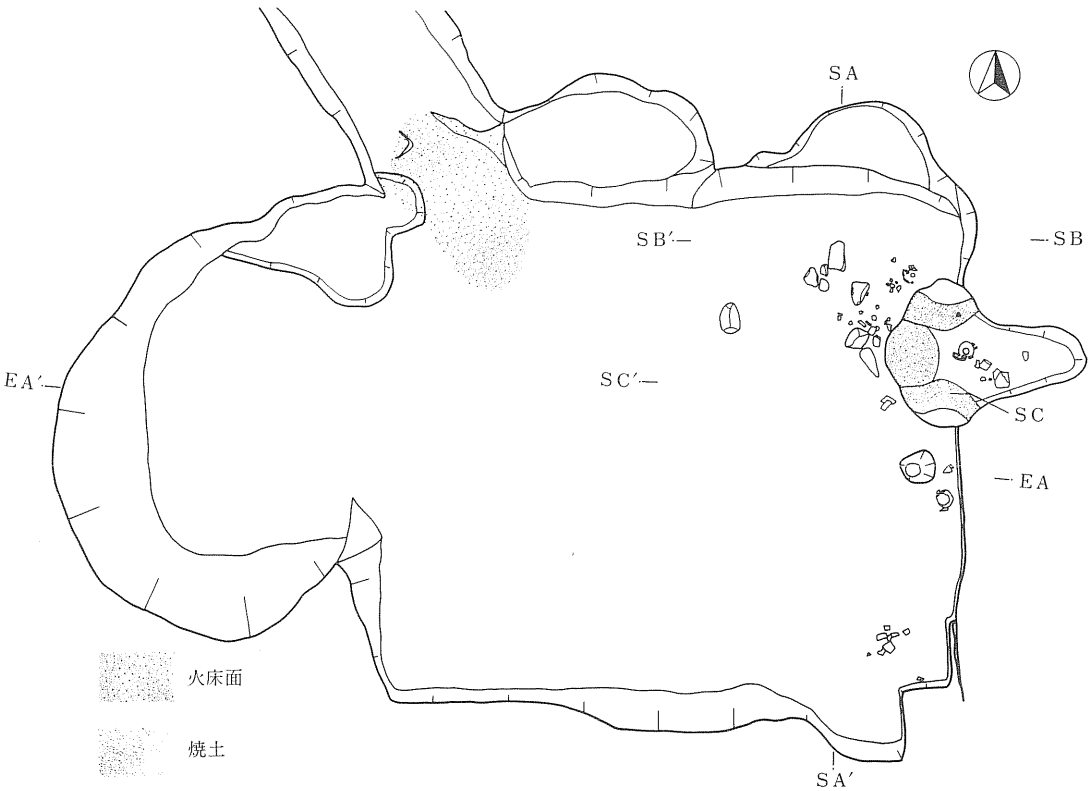
第１号竪穴住居跡（SI07）

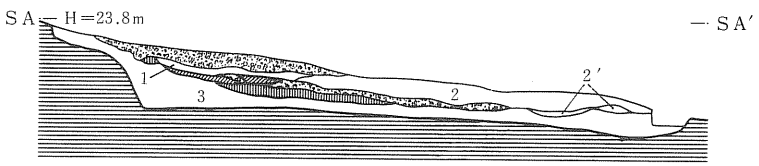
＜位置＞南向き斜面の中腹で平坦になるMF22,MF23,MG22,MG23の各グリッドにまたがる。

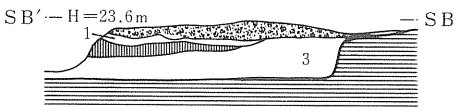
＜確認状況＞第２号炭焼窯跡の前庭部東側で、楕円形に木炭片がまとまる炭溜りを半截し、掘り下げていく途中で土師器が出土し、さらにカマドの燃焼部が検出されたことで、住居跡であることを確認した。住居跡の東北コーナーは、２号炭焼窯跡の前庭部東側で確認できた。

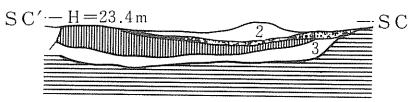
＜平面形・規模＞西側は炭焼窯跡の前庭部と重なっていることから平坦面をその範囲としてとらえ、カマドのつく東辺が４ｍと推定され、平面形は方形を呈すと考えられる。

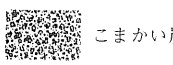
＜堆積土＞住居跡を覆う堆積土は北東側でみると、褐色土を挟んで２層の木炭片の堆積層と明黄褐色土塊の堆積層がある。その下にシルト質の暗褐色土が入る。下層にみえる暗褐色土層が住居跡を広く覆っており、その上位の層は連続していない。したがって、住居跡が暗褐色土で







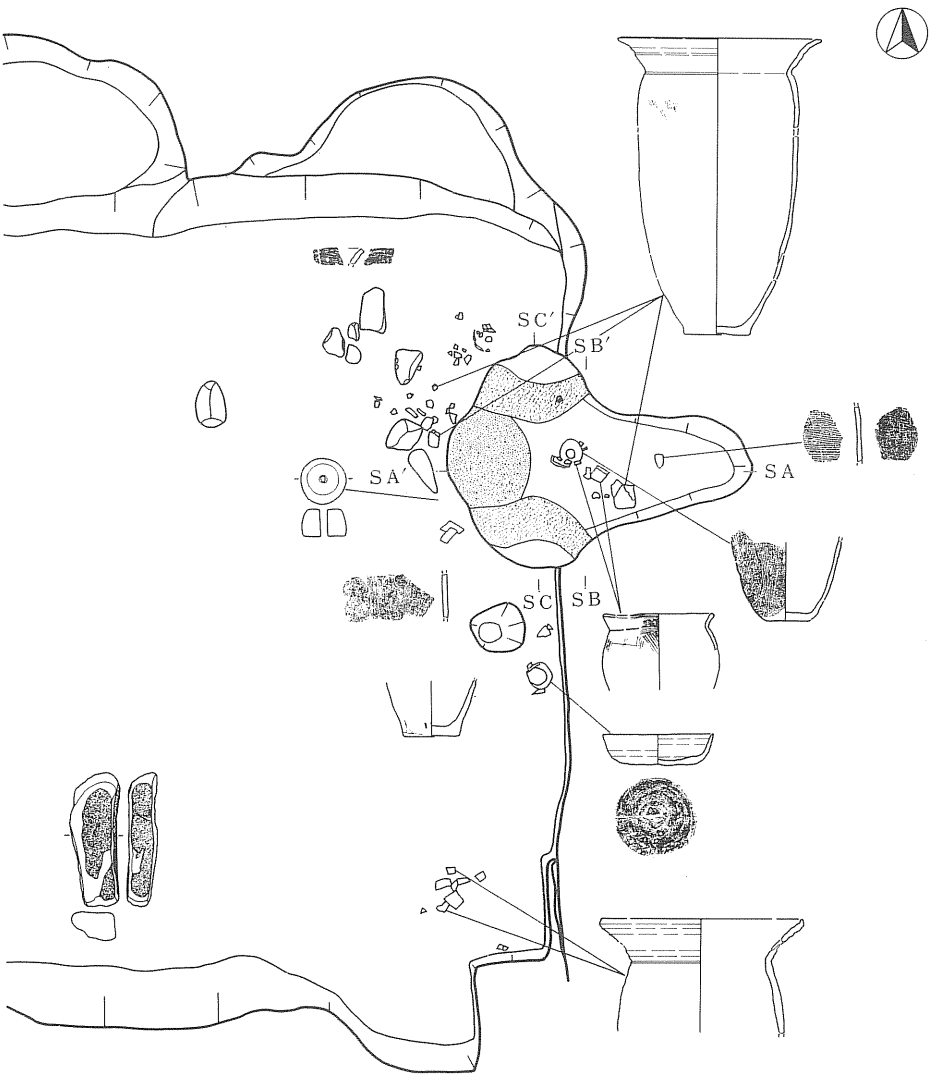


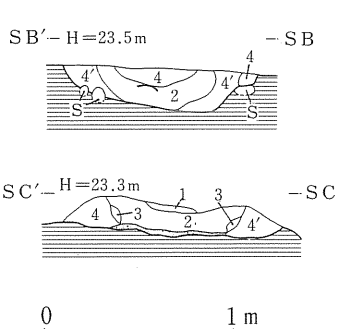


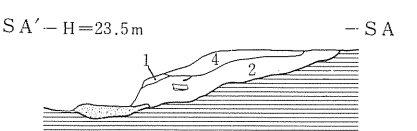
1　暗褐色（10YR3/3）　僅かに炭粒子混在
2　褐色　（7.5YR4/4）　やや緻密　炭・焼土混在
2′　褐色　（7.5YR4/4）　下方に炭片が存在
3　暗褐色（10YR3/3）　粗しょう　部分的に小石が混在

0　2m

第７図　第１号竪穴住居跡







1　暗褐色　(10YR3/4) やや緻密　少量の炭化物粒子混在
2　暗赤褐色 (5YR3/6)　やや緻密　焼土と炭粒子混在
3　明赤褐色 (2.5YR5/8) 壁面の崩れ
4　明赤褐色 (10YR6/8) 緻密
4′　黄褐色　(10YR5/8) 緻密

第８図　第１号竪穴住居跡内遺物出土状況

覆われた後、炭焼窯跡の構築作業にかかわって廃棄された土が積み上げられたものと判断した。

＜壁＞東側の壁は、埋土と地山土とが色調・土質共に似かよっていたことから、遺物やカマドとの関係で判断した。高さは20㎝～40㎝である。西側の壁は検出することが出来なかった。北側の壁は斜面を垂直に削っていて高さ70㎝程である。南側の壁は高さ30㎝程である。

＜床面＞東側の床面は平坦であり、とくにカマドの周辺は硬くなっている。西側は炭焼窯跡の前庭部と重なり、炭焼窯跡の構築にともなって掘削され凸凹がある。

＜カマド＞住居跡東側の壁の北寄りに設置されていた。黄褐色粘土が盛り上がり、全体が西洋梨状の形を呈しており、細長い部分が住居の外に突き出ている。燃焼部は東壁を20㎝程、煙道部は地山を10㎝程掘り込んで、その上に粘土を盛り上げて構築している。煙道部の先端は浅いピット状になっていて、その直上が煙出しとみられ、東壁際より約70㎝離れている。カマドの燃焼部付近より土師器甕等の遺物が出土している。

＜その他の施設＞カマドの南側にピットが１個検出され、南東側床面には60㎝×80㎝の東西に長い楕円形の焼土の広がりがあった。

＜遺物の出土状況＞遺物は、カマドの周辺に散在していた一群と東辺南側寄りの一群がある。第８図に出土位置を示した。

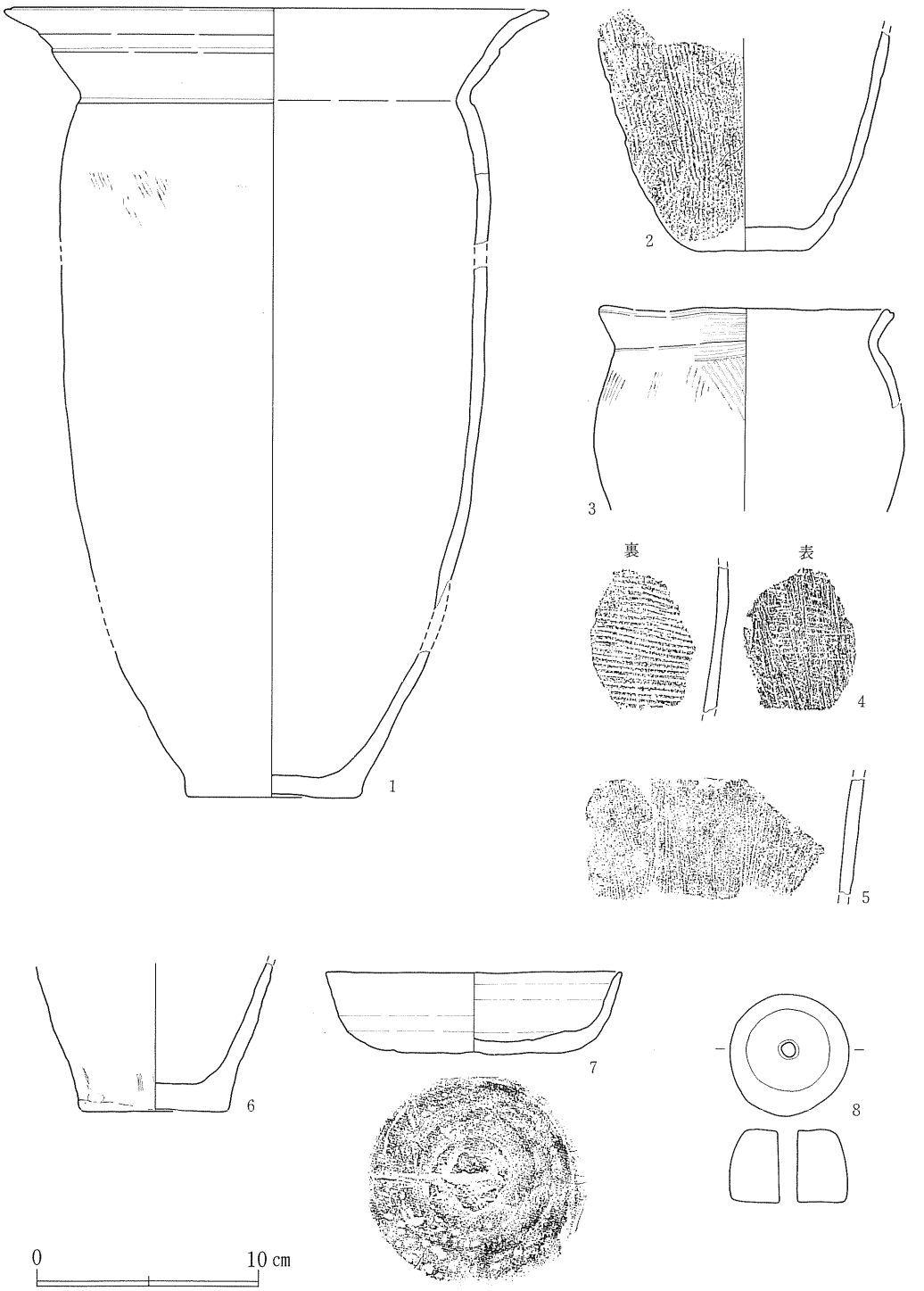
＜遺構内出土遺物＞

第８図に出土位置を示したが１～５がカマド内出土品であり、6・7・9は住居跡南東の埋土内、8・10はカマド近く、11は住居跡南辺中央で出土した。

１．頸部に段をもち、口縁部が強く外反する長胴の甕である。口縁部では中位より上に平行する２条の段差が認められる。底部は平底となる。外面の調整は、口縁部中位から胴部にかけて刷毛目状痕のつく工具（以後刷毛目状工具という）で、縦方向に調整している。内面の調整は、口縁部中位から胴部にかけて横方向及び斜め方向に刷毛目状工具で調整した後に、横方向のナデによってさらに器面を整えている。ただし口縁部上位は横ナデによる調整だけである。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。ただし底部は火熱による表面の剥落が激しい。胴部外面の一部に煤状炭化物が付着している。

２．甕の底部である。底面に不明瞭ながら圧痕があったとみえる。底辺部は丸味をもっている。胴部外面は縦方向に粗い刷毛目状工具で調整した後にナデている。内面は横方向にすきまなく刷毛目状工具（２㎝あたり10本）で調整しているが、底面の内面は、指頭による粗末なつぶしだけである。色調は赤橙色を呈し、表面は火熱によって剥落している。

３．頸部が短く外反し胴部に膨らみをもつ、小型の甕である。口縁は、いくぶん波を打っている。外面調整は頸部から下が縦方向または斜め方向に刷毛目状工具（２㎝あたり７本）で調整している。口縁部は横ナデが施されている。内面は、口縁部から胴部にかけて横方向に刷毛目



第９図　第１号竪穴住居跡内出土遺物（１）

状工具（２㎝あたり７本）で調整した後に軽い横ナデを行っている。胴部は火熱による剥落が著しい。焼成は良好である。内外面には煤状炭化物の付着がみられる。

４．甕の胴部破片である。外面は縦方向に刷毛目状工具で調整しており、内面は刷毛目状工具で横方向にシャープなタッチの調整をしている。

５．甕の胴部破片である。外面は縦方向に刷毛目状工具（１㎝あたり７本）で調整している。内面は剥落が激しくなめらかな部分が少し見えるのみである。

６．甕の底部である。平底を呈する。胴部下半の外面調整は縦方向に刷毛目状工具で調整している。胴部内面の調整は部分的に刷毛目状痕が残り、底部内面はなめらかである。内外面共に火熱による剥落がみえる。

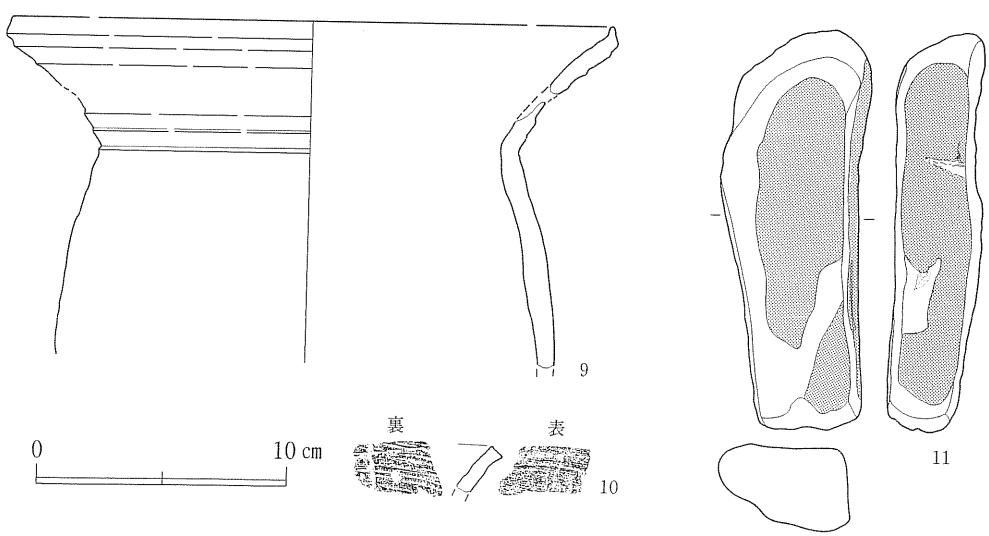
７．須恵器杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りであり、体部との境は明瞭でなく丸底を呈する。体部下半は丸味をもち、上半は直線的に立ち上がる。

８．紡錘車であり、表面は磨かれている。断面は台形状を呈し、底面と側面との角度は約75度である。中央の孔径は6.5㎜であり、重さは96.6gある。

９．頸部に段をもち、口縁部が外反する長胴の甕である。口縁部では平行する４条以上の段差が認められ、口唇が直立している。内外面ともにナデられており、外面胴部上半の一部に刷毛目状痕の一部がみられるだけである。色調は黄褐色で、焼成はやや弱い。

10．甕の口縁部である。口唇部は面取りされている。内面は横方向の刷毛目状痕が残る。

11．砥石である。流紋岩でざらざらしている。凸凹している面を除いて、３面を使用している。



第10図　第１号竪穴住居跡内出土遺物（２）

第１号炭焼窯跡（SK01）

＜位置＞調査区斜面上位に位置し、MF24. MF25. MG25. MG26グリッドにかかる。

＜確認状況＞斜面においては、窯本体を暗褐色土の細長い落ち込みとして、斜面下において前庭部を焼土・木炭片が混在した暗褐色土の円形の落ち込みとして確認した。また前庭部に接して炭の細片がまとまった炭溜りも確認できた。

＜平面形・規模＞地山を掘り込んだ半地下式の炭焼窯跡である。焚口から奥壁までの長さ7.6ｍ、床面の幅は、奥壁でほぼ100㎝・中程で90㎝・焚口付近で70㎝であり、確認面からの深さは、奥壁で35㎝・中程で50㎝・焚口付近で50㎝である。

＜主軸方位＞Ｎ－35°－Ｗである。

＜堆積土＞窯本体は３層にわかれ１．２層は周囲からの流入、３層は壁の崩落による堆積と考える。また奥壁付近の２層下部で床面に横たわる炭化材が検出されている。

＜各部位の状況＞

＜煙出し＞煙道部の径は15～20㎝であり、奥壁中位を斜めに掘り抜いて窯体から15㎝離れて上方に貫通している。煙出し出口は、円形を呈し直径28㎝である。

＜炭化室＞壁は底辺から斜め方向に開いて立ち上がり、燃焼の影響によって数センチの厚さで赤褐色に変化している所もある。底面は焚口付近で中央が窪み、窯体中央部から先端にかけては平坦に近くなる。底面の傾斜角は、14～19度であり、燃焼による影響は表面にとどまる。

＜焚口＞焚口はすぼまりほぼ70㎝である。焚口付近の火床は径65㎝程の円形に赤変している。直上にも凹型に広がる火床があり、この火床は両端の方が激しく赤変している。

＜前庭部＞径３ｍほどの円形を呈し、ほぼ平坦である。ピット及び排水溝は検出出来なかった。焚口の正面には、最下層に厚さ10㎝程の木炭だけの層が、その上部に硬い焼土ブロックの層が広がっている。この層は最終的な掻き出し時にできたと考えられる。南東側に径２ｍの円形で、細かい木炭片がまとまった炭溜りと思われる場所がある。

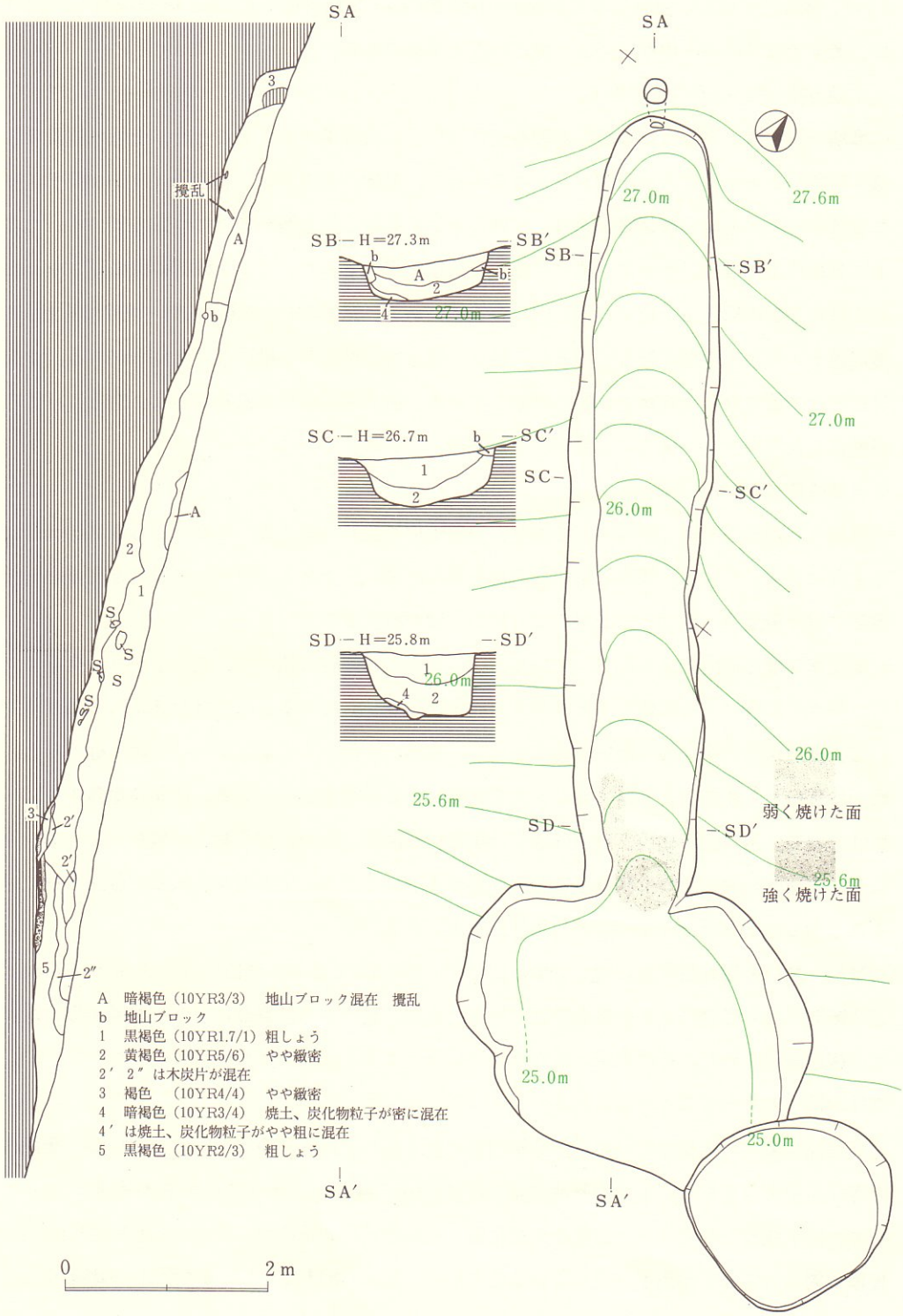
＜遺物の出土状況＞遺物は出土しなかった。

第２号炭焼窯跡（SK04）

＜位置＞１号炭焼窯跡の斜面下約７ｍ南側に位置し、MF22.MF23.MG22.MG23.MG24.MH23.MH24グリッドにかかる。

＜確認状況＞窯本体は斜面において、細長い暗褐色土の落ち込みと、とぎれとぎれに続く焼土や炭化材を検出し、斜面下において前庭部を焼土と木炭片が混在した暗褐色土の円形の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞地山を掘り込んだ半地下式の炭焼窯跡である。焚口から奥壁までの長さ



第11図　第１号炭焼窯跡

5.2m、床面での幅は、奥壁でほぼ100㎝・中程で90㎝・焚口付近で100㎝、確認面からの深さは、奥壁でほぼ65㎝・中程で60㎝・焚口付近で65㎝である。

＜主軸方位＞N－33°－Wである。

＜堆積土＞窯体の堆積土は連続した線を引けない。これは深さがあることと、上位の施設の倒壊に時間差があったことが起因すると考えられる。窯体の上方では、奥壁から1.5m程下がった位置から細かい炭の堆積層があり、炭層の上には焼けた粘土塊が多量につまっている。その上に黄褐色土が覆い、さらに上位には褐色土が厚く覆っており、プラン確認の際に見つかった炭化材が2層の褐色土上位で斜めに向いた状態にある。窯体の下方でも、炭層・焼けた粘土塊・黄褐色土・褐色土の順に覆っているが、焼けた粘土塊の堆積が2段になった部分がある。また焚口付近で焼けた粘土塊がより厚く堆積している。前庭部は中程に段差があり、前方には焼土が混在した黒褐色土、後方には暗褐色土が堆積している。

＜各部位の状況＞

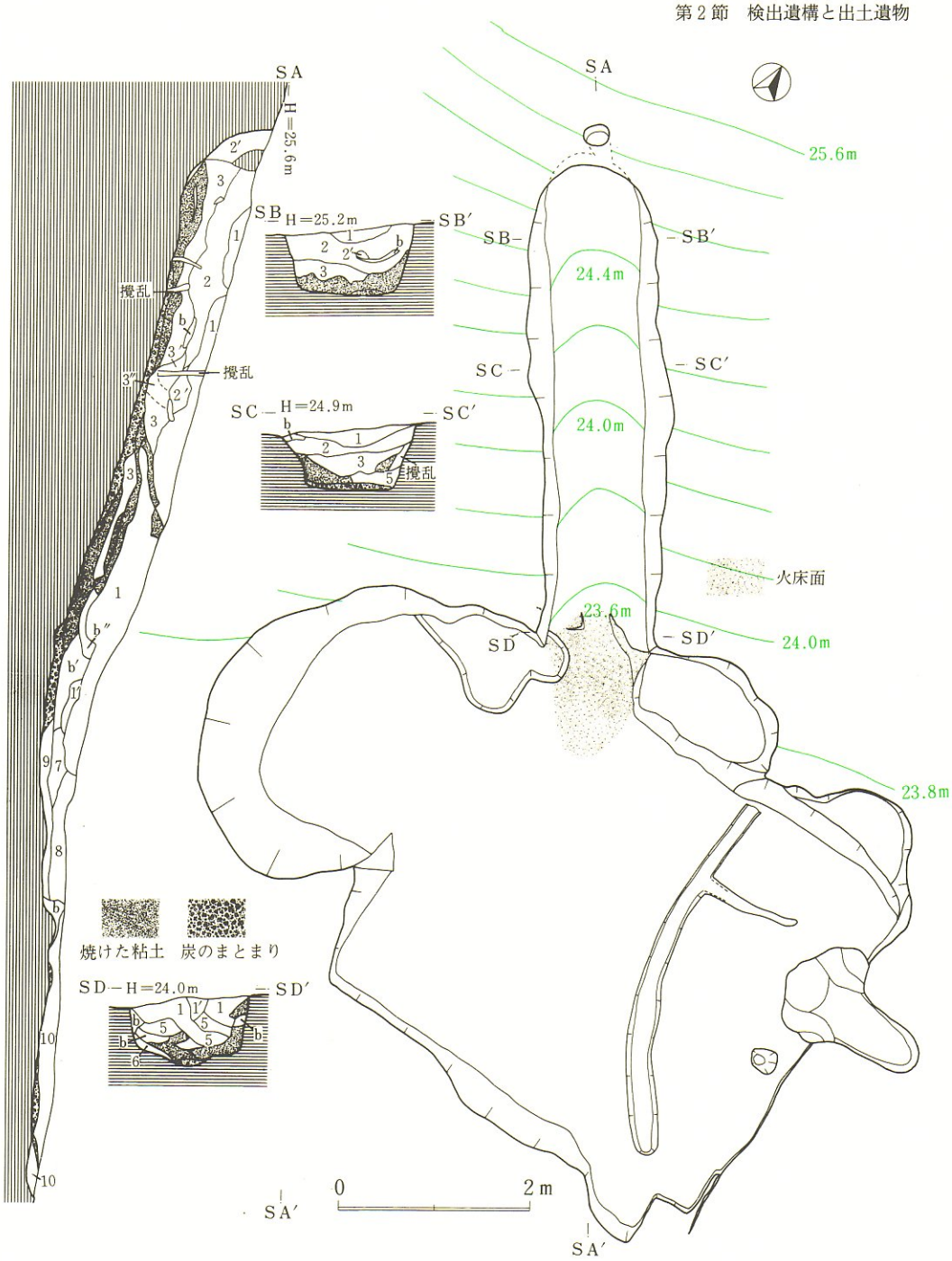
＜煙出し＞煙道部の径は20～25㎝であり、奥壁中位を斜めに掘り抜いて窯体からほぼ25㎝離れて上方に貫通している。煙出し出口は円形を呈し直径25㎝である。煙出しの縁辺と奥壁中位煙道部の付け根部分で径15～20㎝程の煤の付いた礫が検出されている。

＜炭化室＞壁は地山でしっかりしていて、底辺から斜め方向に開くが、立ち上がりは垂直に近く、燃焼の影響によって数センチの厚さで赤褐色に変化している。底面は全体にしっかりしていて、焚口付近の中央部は軽い鍋底状を呈し、窯体の中程から先端部までは平坦に近くなる。底面は焚口から先端部まで厚さ数センチで燃焼による影響を受けている。底面の傾斜角は12～19度である。第13図に褐色土層で確認した炭化材を図示したが、炭化材の間隔がつまっていること、東西壁の対応する位置にあること、斜め下方に下がり、中が折れた状態で確認されていることから、上屋構造に使用された木材と考えられる。

＜焚口＞焚口の幅は炭化室に対して少し広がり、100㎝程である。焚口付近の火床は径90㎝ほどの範囲で最も燃焼による影響を受けている。また、焚口から前庭部に下がった90㎝程の地点で火床が確認された。その火床は現在の焚口に比べて少し低い段差で位置する。このことから、窯体が縮小されたものと考えられる。

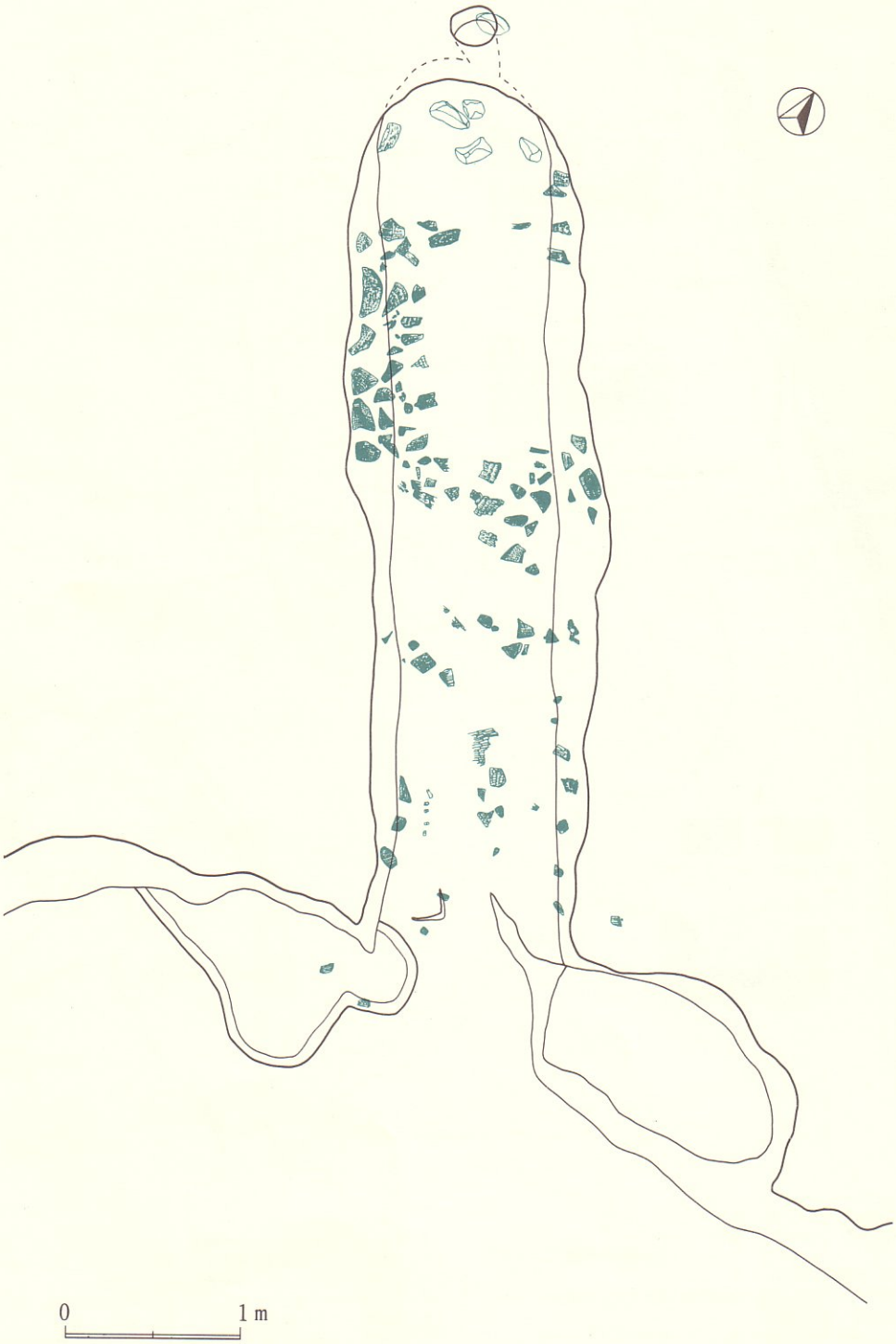
＜前庭部＞窯体の両側において斜面を楕円形に削り出し、前庭部をつくりだしている。西側に大きなふくらみをもつ。また東側地山面に長さ3.8m、幅30㎝、深さ7㎝の溝が南北に走っていて、排水施設とみられる。前庭の東側に接して細かい炭が楕円形にまとまった炭溜りがある。規模が異なり間に暗褐色土が入っていることから、窯体の縮小にともなって炭溜りの移動があったものとみられる。

＜遺物の出土状況＞遺物は出土しなかた。



b　地山ブロック
b′ 明赤褐色（5YR5/8）　焼土ブロック
b″ 明赤褐色（7.5YR5/8）焼土ブロック
1　褐色　（10YR4/4）粗しょう　炭化物粒子混在
1′ は炭化物粒子が少ない
2　褐色　（10YR4/6）やや緻密　所々に大きな木炭片
2′ 暗褐色　（10YR3/4）
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）粗しょう　所々に大きな木炭片
3′ 3″ と地山ブロックが多くなる
4　褐色　（10YR4/5）やや緻密
5　黒褐色　（10YR2/3）粗しょう　焼土ブロックと炭粒子混在
6　赤褐色　（5YR4/8）やや緻密　焼けた壁面
7　黒褐色　（10YR2/3）粗しょう　焼土粒子が多く混在
8　黒褐色　（10YR2/2）粗しょう　炭粒子が多く混在
9　黒褐色　（10YR3/2）粗しょう　焼土粒子が多く混在
10　暗褐色　（10YR3/4）粗しょう　焼土・炭粒子混在

第12図　第２号炭焼窯跡



第13図　第２号炭焼窯跡における炭化材検出状況

第１号土坑（SK02）

＜位置・確認状況＞第１号炭焼窯跡と第２号炭焼窯跡の間の斜面上位にあたるMH25グリッドで検出した。確認面は地山の黄褐色土層である。

＜規模・平面形＞2.2×1.5ｍの東西に長い楕円形を呈する。

＜堆積土＞壁際に暗褐色土が堆積し、上位に黒褐色土が覆っている。東側と北側の床から壁面にかけて、炭化材の固まりがあった。

＜壁＞底面との境を曖昧にしてゆるやかに立ち上がる。

＜底面＞比較的平坦である。

＜遺物＞遺物は出土しなかった。

第２号土坑（SK03）

＜位置・確認状況＞第１号炭焼窯跡と第２号炭焼窯跡の間の斜面中腹にあたる。MG24.MG25グリッドで検出した。確認面は地山面の黄褐色土層である。

＜規模・平面形＞直径約2.6ｍの円形である。

＜堆積土＞上下２層に分けられる。どちらも焼土と炭が混在しているが、１層の方が炭の混在が多い。

＜壁＞底面との境界を曖昧にしてゆるやかに立ち上がり、境界の判断がつかない所がある。

＜底面＞ゆるやかな凸凹があるがおおよそ中央部が窪む鍋底状である。床面には径15～25㎝大の礫が散在する。火を受けた跡のある礫が大部分である。礫のあり方に規則性は見あたらない。

＜遺物＞遺物は出土しなかった。

第３号土坑（SK05）

＜位置・確認状況＞住居跡の南側緩斜面にあたるMG21グリッドで検出した。確認面は地山の黄褐色土層である。

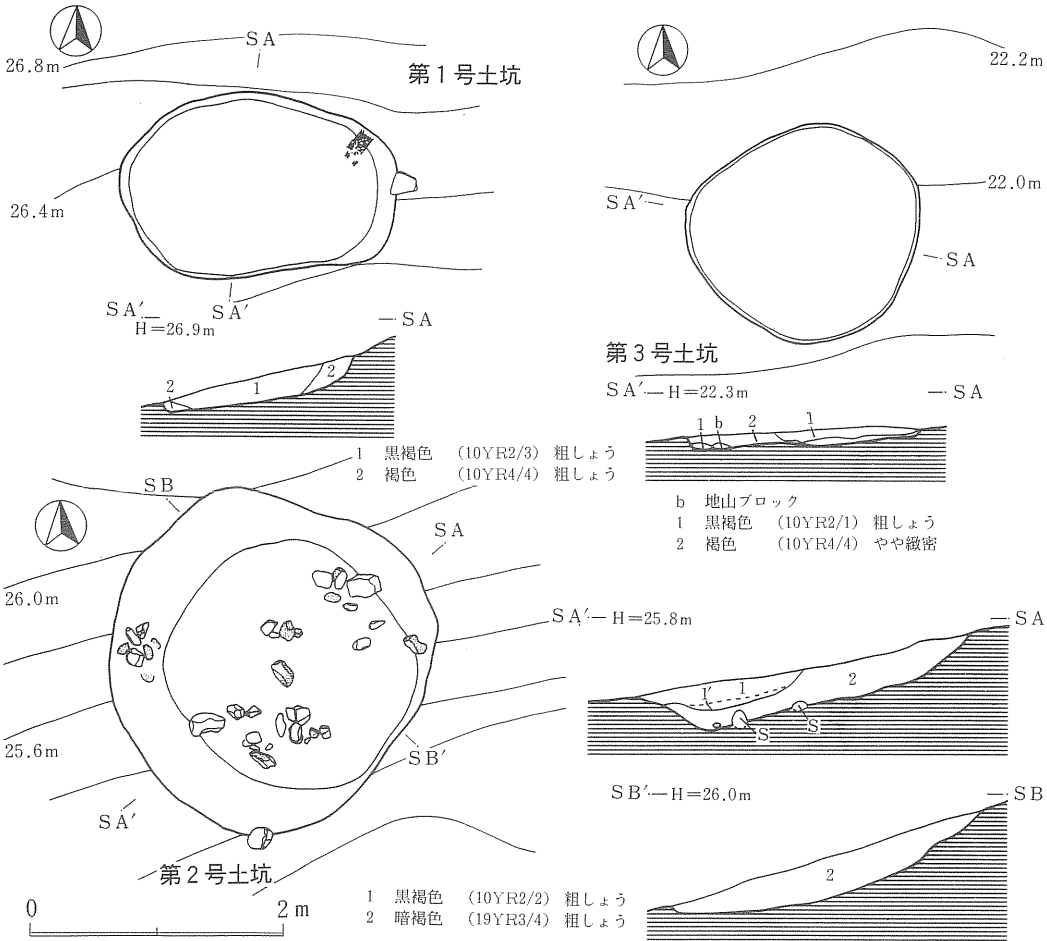
＜規模・平面形＞直径約1.8ｍの円形を呈する。

＜堆積土＞上下２層がいずれも薄い堆積をしている。２層は粘土質であり、地山塊が混在する。３層は１層とほぼ同じである。

＜壁＞外に向かって緩く立ち上がるが、南側と東側ではきちんとした壁を形成していない。

＜底面＞平坦である。

＜遺物＞遺物は出土しなかった。



第14図　第１号土坑・第２号土坑・第３号土坑

遺構外出土土器・石器

ここでは調査区内で出土した遺物の内、遺構外のものと採集品を合わせて説明したい。時代別にみると、縄文時代の遺物として土器・石器があり、古代の遺物として土師器・須恵器がある。出土地点をみると、縄文土器はMG27・MG28グリッドといった斜面上方より出土しており、土師器・須恵器は住居跡の下方東南斜面から出土している。

＜土器＞

Ⅰ　**縄文土器**（第15図１～５）

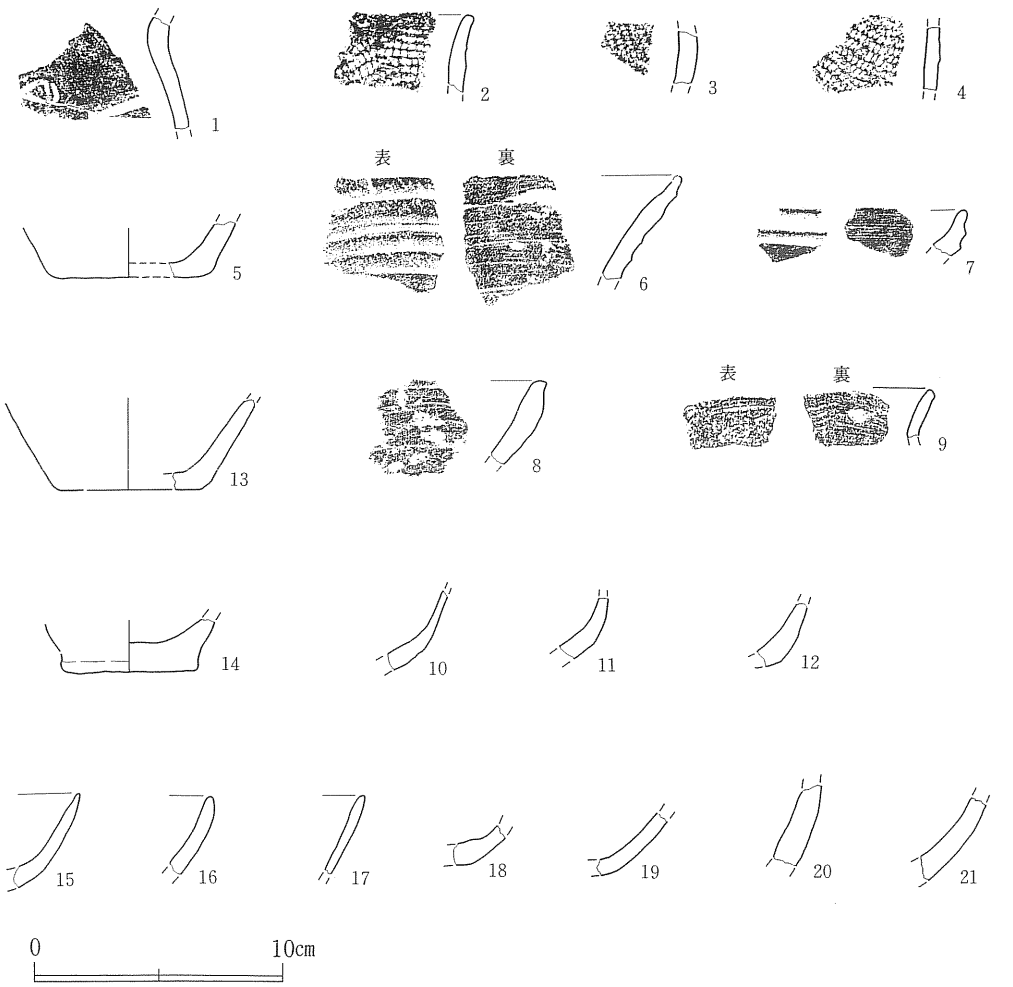
１は鉢形土器の頸部破片である。無文の地に沈線で文様が描かれている。

２は鉢あるいは深鉢形土器の口縁部破片で、ＬＲ縄文を縦位・斜位に傾きをかえて施されている。

３、４は器形が不明の破片であり、縄文が施されている。

５は底部の破片である。表面の剥落が激しい。

Ⅱ　**土師器**（第15図６～14）



第15図　遺構外出土土器

６、７は長胴甕の破片であり、外面に段をもつ口縁部の破片である。いずれも内面に刷毛目状痕が残る。８、９は甕の口縁部破片であり、内外面に横方向の刷毛目状痕がみられる。13,14は甕の底部である。14は底辺部をつまみ出している。10,11,12は杯の破片である。

Ⅲ　須恵器（第15図15～21）

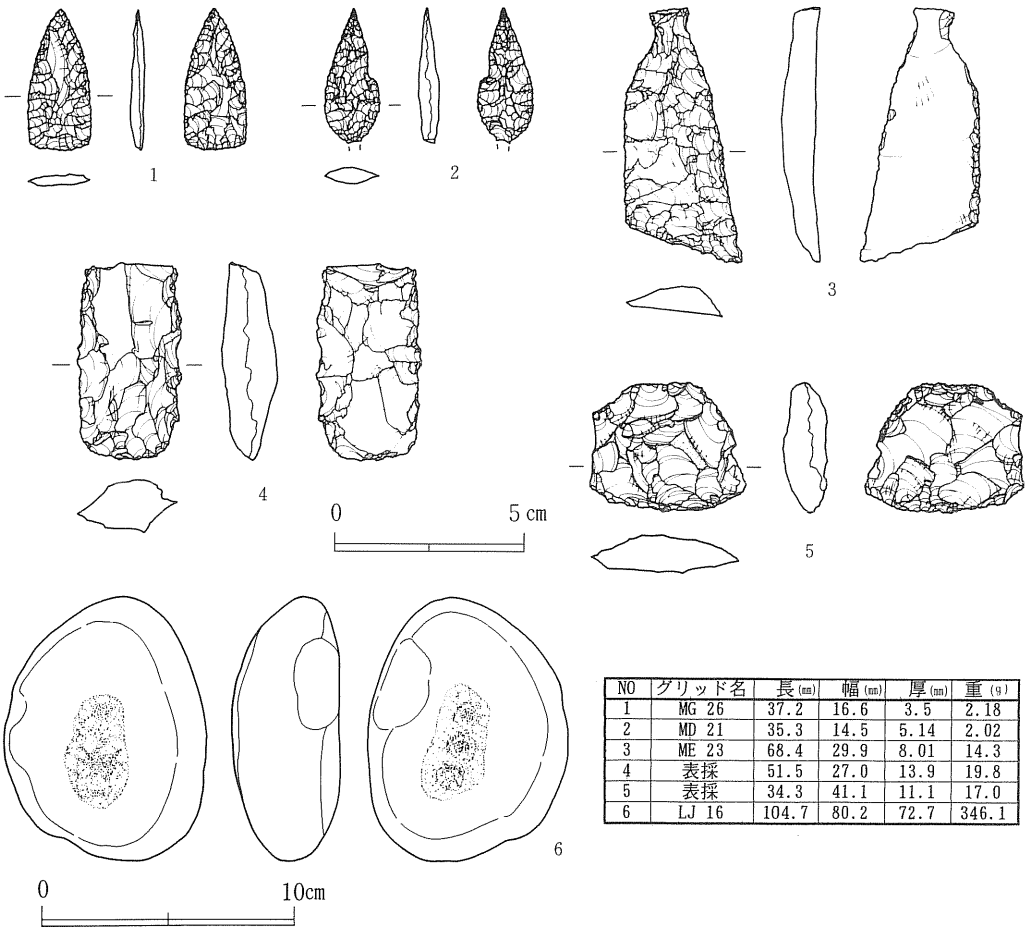
15～17は杯の口縁部破片であり、18,19は杯の底部破片である。20,21は壷の胴部破片とみえる。

＜石器＞

石器は６点出土した。MG25とMD21グリッドで石鏃が、ME23グリッドで石匙が、JT16グリッドで凹石が出土しており、他は採集品である。

石鏃（第16図１、２）

１は無茎で、２は有茎である。両面とも側縁からの調整加工によって仕上げている。



NO	グリッド名	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
1	MG 26	37.2	16.6	3.5	2.18
2	MD 21	35.3	14.5	5.14	2.02
3	ME 23	68.4	29.9	8.01	14.3
4	表採	51.5	27.0	13.9	19.8
5	表採	34.3	41.1	11.1	17.0
6	LJ 16	104.7	80.2	72.7	346.1

第16図　遺構外出土石器

石匙（第16図３）

縦型の石匙である。縦長の剥片を素材としており、片面は平坦な主要剥離面を残し、もりあがって凸を呈する背面に主に調整加工を施している。調整加工はつまみ部から、側縁先端まで施されている。

石箆（第16図４）

表面採集したものである。短冊形を呈したとみられるが、基部は失われている。肉厚の剥片の両面を調整加工して、形をつくりだしている。

剥片石器（第16図５）

表面採集したものである。表面の一部に主剥離面をそのまま残す。両面から調整加工をして、先端に刃部を作り出している。

凹石（第16図６）

自然石の広いフラットな両面に凹みがある。

第５章　自然科学分析

第１節　考古地磁気調査

秋田大学鉱山学部　西谷　忠師

１．はじめに

金足岩瀬字松館の大平遺跡（北緯39度51分20.625秒、東経140度2分27.3684秒）からは８世紀中頃から８世紀後半にかけての炭焼窯跡、住居跡が検出されている。本調査の目的はこの炭焼窯跡、住居跡の年代を考古地磁気的手法を用いて推定することにある。

２．試料について

試料は直径24㎜のポリカーボネイト製の立方体キューブを地中に挿入して採集した。古地磁気用試料は、第１号炭焼窯跡から58個、第２号炭焼窯跡から100個、住居跡から25個の計183個採集した。しかし、サンプル採集ケースが変形したり、レキの影響で試料が取れないなど、採集場所の状態によって試料として不適当なものもあった。実際に測定した個数は、第１号炭焼窯跡で50個、第２号炭焼窯跡で89個、住居跡で22個、総計161個であった。表１に採集試料の一覧表を示す。表には遺構名、試料名、測定試料数、自然残留磁化強度の平均値、帯磁率の平均値が示してある。試料名はデータ処理を行うために便宜的に付けた名称である。現場では試料の傾きを示す走向と傾斜を記録している。データ処理でこの傾きを補正して磁化方向を求めた。

写真１～３は第１号炭焼窯跡、第２号炭焼窯跡、住居跡カマドの採集場所である。考古学的には８世紀後半に使われたと考えられている。写真１は第１号炭焼窯跡の試料採集場所を示す。第１号炭焼窯跡中部からは30個の試料を採集している。写真２は住居跡カマドからの試料採集場所である。写真３は第２号炭焼窯跡の試料採集場所である。

表１　金足岩瀬字松館大平遺跡採集試料一覧

遺構名	試料名	測定試料数	自然残留磁化強度（A／m）	帯磁率（SI-unit）	考古推定年代
第１号炭焼窯跡	C01	50	8.328×10^{-2}	4.957×10^{-3}	８世紀後半
第２号炭焼窯跡	C04	89	2.620×10^{-1}	1.120×10^{-2}	８世紀後半
住居跡カマド	J07	22	6.694×10^{-1}	1.115×10^{-2}	８世紀中頃

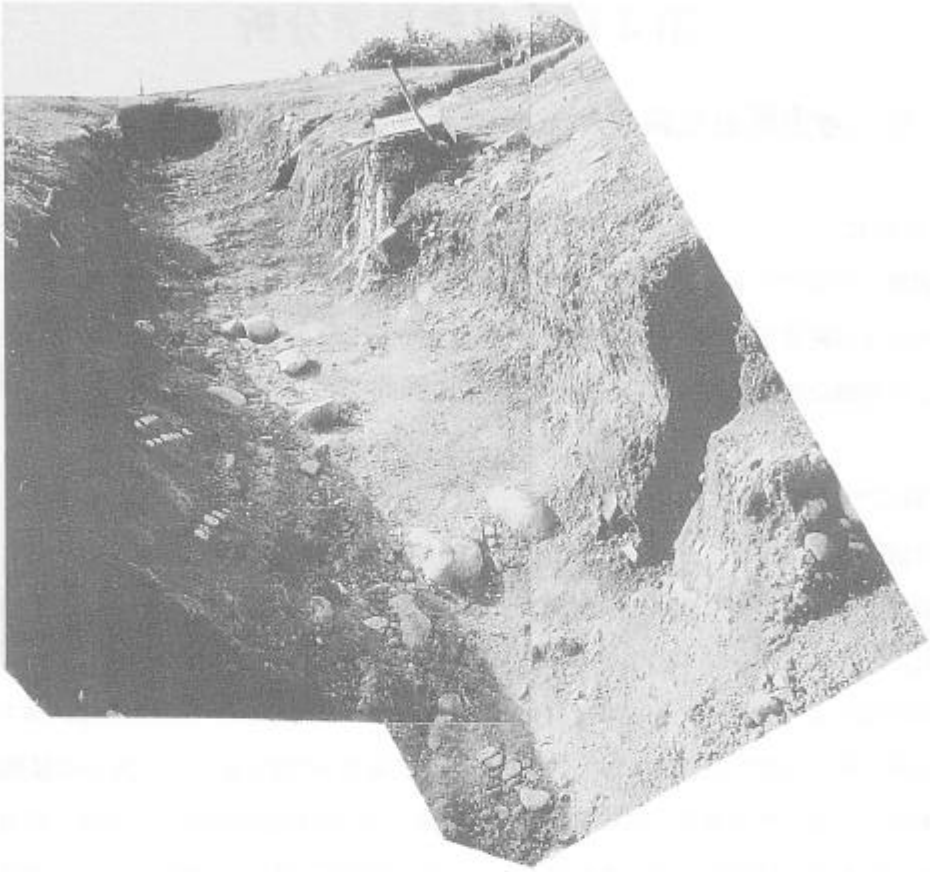


写真１　第１号炭焼窯跡試料採集場所

写真２　住居跡カマド試料採集位置

写真３　第２号炭焼窯跡試料採集位置

３．測定

残留磁化強度および方向はスピナー磁力計（テラテクニカ製RM－245）を用いて測定した。採集したままの状態で何の処理も行っていない残留磁化成分を自然残留磁化（NRM）と呼んでいる。自然残留磁化は必ずしも加熱された当時の磁化を示している訳ではない。なぜなら、後で二次的に付加した磁化成分と重畳した形で自然残留磁化が観測されるからである。例えば図１は第１号炭焼窯跡の自然残留磁化の測定結果である。この図はシュミット等積投影法で、球面上に分布する偏角、伏角のペアーを平面的に表現したものである。二次的磁化成分がほとんど無ければ測定値のまとまりが良くなり、シュミット円に投影した点はほぼ一箇所にまとまるはずである。しかし、図１では測定値はかなり分散したデータとなっている。図中白抜きの丸は磁化の伏角方向が現在の地球磁場と逆方向を向いていることを示している。８世紀頃から現在まで地球磁場そのものは反転していないため反転した磁化は何らかの攪乱作用によるものである。

二次的な磁化成分は加熱時に獲得された磁化成分よりも一般的に弱く、この成分を消去する効果的な方法は交流消磁である。交流消磁法は無磁場中で試料にある強さの交流磁場を加えてその強度をゼロまで下げ、磁化成分を測定する。続いて、先程の強度よりも強い交流磁場を与えて同様の操作を繰り返す。この手順によって二次的に付加された磁化成分は途中の段階で消去され、最初に獲得された安定な磁化成分を分離することが可能となる。図２は第１号炭焼窯跡の交流消磁を行ったあとのデータの分布状態である。反転した磁化成分もなくなり、まとまりが良くなっていることがわかる。

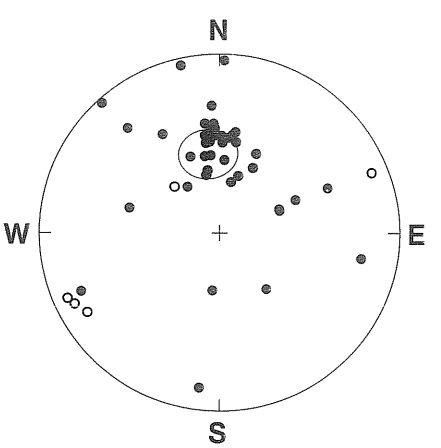


図１　第１号炭焼窯跡試料の自然残留磁化の分布
黒丸は現在の地球磁場と同じ方向を、白丸は現在と逆方向の磁場を示す。

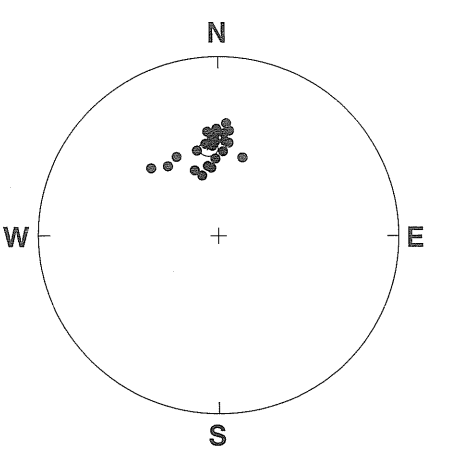


図２　第１号炭焼窯跡試料の交流消磁後の磁化分布
交流消磁によって磁化のまとまりが良くなっている。

全ての試料に対して交流消磁を行い、平均の偏角と伏角を求めた。データのまとまりを示す指標が95％信頼区間である。この値は95％の確率で真の値が含まれる範囲を示し、値が小さい方が平均の偏角、伏角の信頼性が高いことを示している。全ての試料で交流消磁によって磁化方向のまとまりに改善がみられた。図３は第２号炭焼窯跡試料の交流消磁後の磁化分布を、図４は住居跡試料の交流消磁後の磁化分布を示す。

なお、試料採取地における現在の地磁気偏角・伏角の値は、偏角－7.834度、伏角53.435度である。Hirooka（1971）の結果は京都（北緯35.0224度、東経135.7650度）における結果で、観測される偏角、伏角は偏角－6.57度、伏角48.195度である。この結果を金足岩瀬字松館大平遺跡の結果と比較するため、緯度、経度による地磁気の変化は過去も現在と同じであったと仮定して偏角、伏角の補正を行う。補正は偏角の測定値から7.834度を、伏角の測定値から5.240度を差し引いて実行している。

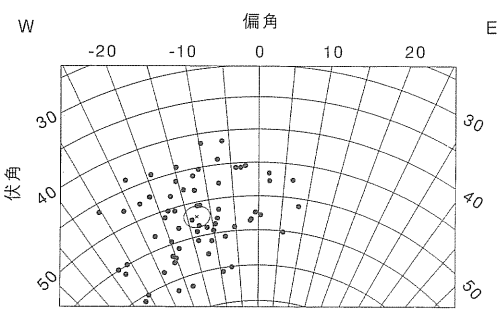


図３　第２号炭焼窯跡試料の交流消磁後の磁化分布
楕円は95％信頼区間を示す。

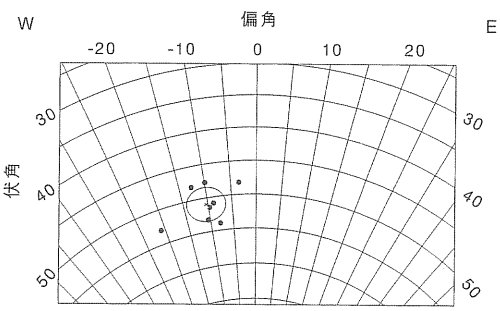


図４　住居跡の交流消磁後の磁化分布

表２　金足岩瀬字松館の大平遺跡試料の測定結果

遺構名	試料名	平均試料数	偏角（度）	伏角（度）	95％信頼区間	考古地磁気推定年代(A.D.)
第１号炭焼窯跡	C01	24	－ 5.628	49.001	3.906	770±50
第２号炭焼窯跡	C04	64	－13.071	52.067	1.627	767±20
住居跡カマド	J07	8	－10.357	50.894	2.560	770±30

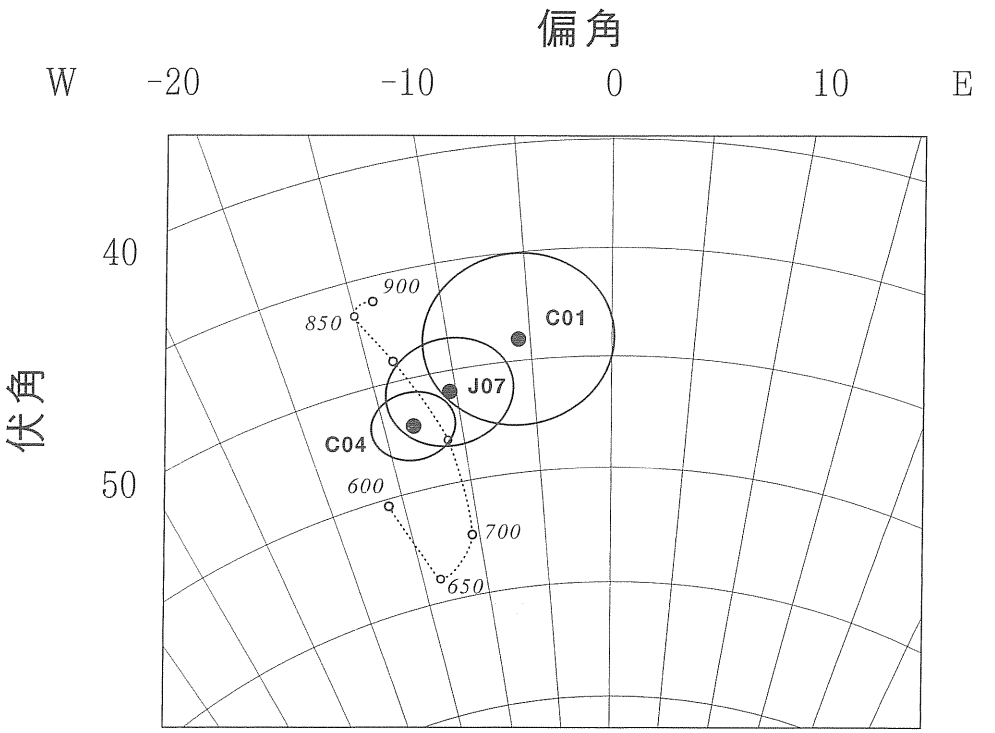


図５　600年～900年の地磁気永年変化と平均の偏角、伏角

４．年代推定

地磁気の永年変化を調べたHirooka（1971）の結果を参照して年代推定を行った。図５は測定によって得られた平均値とHirooka（1971）の示したA.D.600からA.D.900年の地磁気永年変化とを示してある。楕円の大きさは平均値の信頼度を表す。平均値の一覧表を表２に示す。誤差を考慮して、第１号炭焼窯跡は770±50年、第２号炭焼窯跡は767±20年、住居跡カマドでは770±30年と推定できる。いずれの遺構もほぼ同時期であると言えるだろう。

５．まとめ

金足岩瀬字松館の大平遺跡から試料を採集し、考古地磁気学的手法を用いて年代推定を行った。その結果、第１号炭焼窯跡、住居跡カマドでは770年前後、第２号炭焼窯跡では767年前後の値を得た。試料採集を行ったこれらの遺構は全て同時期であると思われる。

文献

Hirooka, Kimio (1971) : Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, 38, 167－207.

第２節　放射性炭素年代測定

学習院大学年代測定室

大平遺跡から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数（B.P.）である。

年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは、３σに相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してある。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が２σ以下のときは、Modernと表示し、δ^{14}C%を付記してある。

表　大平遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料No.	出土地点	試料	年　代　値	コ　ー　ド　No.
50HA	第２号炭焼窯跡	炭化材	1,220±100（A.D. 730）	Gak－18154
50HF	第２号炭焼窯跡	炭化材	1,600± 90（A.D. 350）	Gak－18155

第３節　炭化材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

１．試料

試料は、炭化材10点（試料番号い～ぬ）である。

２．方法

試料は割折またはカミソリを用いて新鮮な基本的な３断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）をつくり、落射顕微鏡によって75～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本と対比して行った。

３．結果と所見

結果は以下の表に示し、記載を記す。なお、各断面の顕微鏡写真を示した。

試料	樹種（和名	／ 学名）
い	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
ろ	サクラ属	*Prunus*
は	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
に	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
ほ	アカメガシワ	*Mallotus japonica* Muell. Arg.
へ	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
と	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
ち	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
り	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
ぬ	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　　図版１

横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部で小道管は火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はおおむね平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道（西南部）・本州・四国・九州に分布する。落葉高木で、通常高さ20ｍ、径40㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ30ｍ、径２ｍに達する。耐朽性強く、水湿に耐え、保存性はきわめて高い材で、現在では建築・家具・器具・土木・鉄道沈木・船・彫刻・ろくろ細工・薪炭・椎茸ほだ木など広汎に用いられる。

サクラ属　*Prunus*　バラ科　　図版２

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個複合して均一に散在する散孔材である。道管の直径は早材から晩材にかけて徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は同性に近い異性放射組織型で、１～３細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属にはシウリザクラ・ウワミズザクラ・ヤマザクラ・モモ・ウメなどがあり、落葉の高木または小高木である。

アカメガシワ　*Mallotus japonica* Muell. Arg.　トウダイグサ科　　図版３

横断面：年輪のはじめにやや小型から中型の道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して配列する環孔材である。晩材部では小型の道管が放射方向に数個連なって散在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりアカメガシワに同定される。アカメガシワは本州・四国・九州に分布する。日本特産の落葉高木で、高さ10ｍ、径30㎝に達する。材はやや軽軟であるが、建築・器具・車両・薪炭などに用いられる。

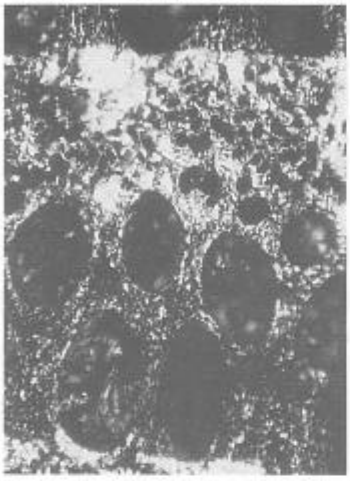
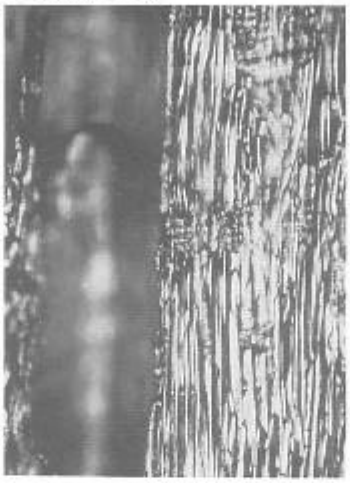
参考文献

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社.

島地謙ほか（1985）木材の構造，文永堂出版.

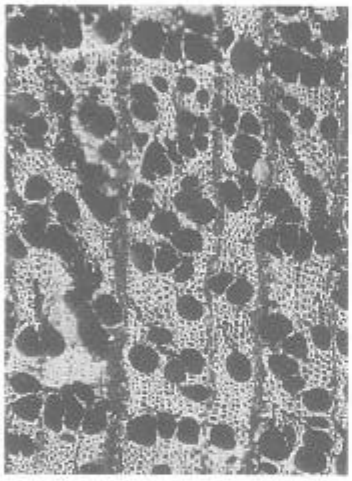
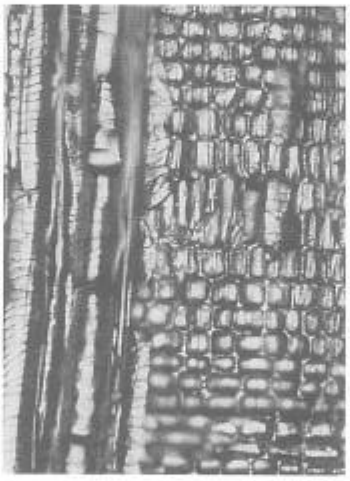
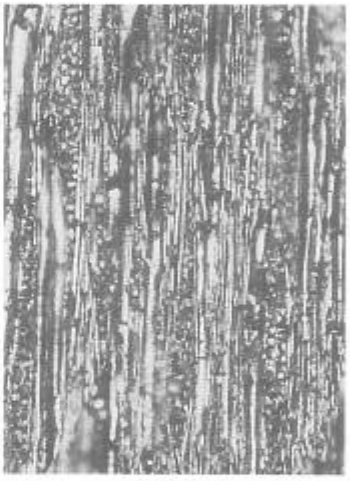
日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法，東京大学出版会.

秋田県、大平遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

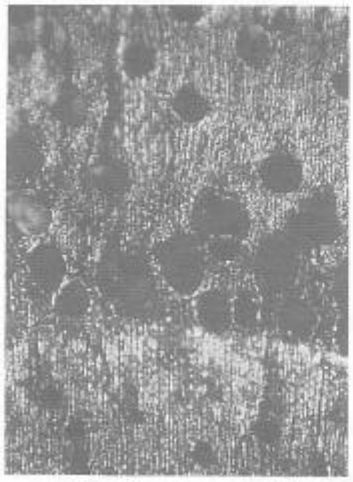
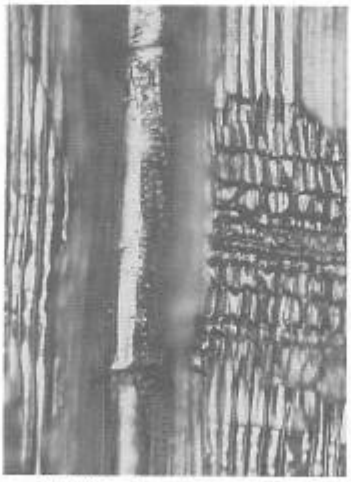
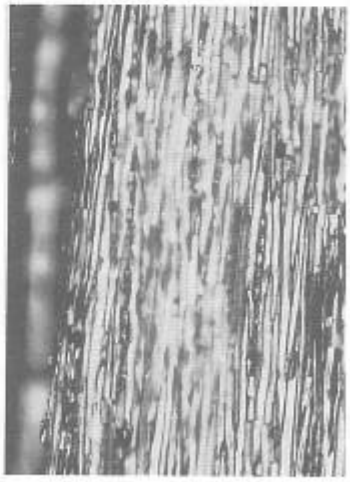
横断面 ――― : 0.4mm　放射断面 ――― : 0.2mm　接線断面 ――― : 0.2mm

1．に　クリ

横断面 ――― : 0.2mm　放射断面 ――― : 0.1mm　接線断面 ――― : 0.2mm

2．ろ　サクラ属

横断面 ――― : 0.4mm　放射断面 ――― : 0.1mm　接線断面 ――― : 0.2mm

3．ほ　アカメガシワ

第6章　まとめ

遺構として検出された古代の住居跡および炭焼窯跡についてその年代・性格について詳述してまとめとしたい。

住居跡と炭焼窯跡については、次の層位上の事実から相対的な関係をつかむことができた。

住居跡のある平坦部は第2号炭焼窯跡の前庭部にあたり、住居跡は炭溜りを掘り下げていって検出されたものである。住居跡の埋土である暗褐色土の上に明黄褐色土の地山土がレンズ状に堆積していることから、住居跡が完全に埋まりきらず少し凹んだ状態の所に、第2号炭焼窯跡の前庭部を構築した際の土を被せたものと考えられた。したがって住居跡が古く、第2号炭焼窯跡が新しいという知見を得た。

住居跡はカマドを中心として出土した土器群の特徴から年代を推定した。頸部に段をもち、口縁部にも数条の段がめぐる長胴甕は、秋田県内では秋田市秋田城跡、秋田市後城遺跡、五城目町岩野山古墳、西目町沼田遺跡でも出土しているが、年代的な裏付けは、秋田市秋田城跡の遺構とその層位関係から推定できただけである。つまり築地を築いた際の土取り穴からの出土土器に同じ特徴をもつ長胴甕があり、築地造営は出羽柵が高清水岡に遷置されたと記録がある天平五（733）年を大きく下がらない時期と考えられることから、8世紀中葉から後葉の年代が推定されるとしている。したがって考古学的な知見と考古磁気年代測定法、放射性炭素年代測定法から導き出した住居跡の構築年代は、8世紀第2四半期から第3四半期とみたい。

住居跡より新しいとした炭焼窯跡については、2基の遺構の比較をした上で年代について考察したい。第2号炭焼窯跡と第1号炭焼窯跡の関係については、方向を同じにしていることのほか、構造的に次の共通した特徴をもっている。

1：窯体は地山を斜面に対して直角に掘りこんだ半地下式であり、底面は18～20度の登り勾配で構築されている。

2：窯体先端部は丸味をもっている。

3：煙出し口は奥壁中央にトンネル状の丸い穴を穿って窯体の外に出している。

4：前庭部分は楕円形を呈し、中央が平坦である。前庭部東側に炭溜りと思われる木炭片の堆積層がある。

県内では表1に示したとおり湯ノ沢D・坂の上E・十二林の各遺跡で1基ずつの炭焼窯跡が検出されているが、大平遺跡の炭焼窯跡とは構造的には大きな差がある。そこで同様な形態をもつ須恵器窯跡の変化も含めて考慮した結果、傾斜角度、窯尻の形等から、年代的には湯ノ沢D遺跡・坂の上E遺跡・十二林遺跡の炭焼窯跡より大平遺跡の炭焼窯跡が古く、8世紀後半頃の年代が推定されると判断した。したがって炭焼窯跡は住居跡より新しい8世紀第3四半期か

ら第４四半期に構築されたと考えられる。

遺跡の立地する丘陵地が起伏にとんでいることから、こうした炭焼窯跡が周辺でも検出される可能性があり、範囲確認調査においては今回の調査区からはずれた北側で鉄滓が１点出土していること、広い焼土を持つ遺構が検出されていることから製鉄に関連した遺跡である可能性が高いといえる。また８世紀後半という年代から城柵の設置に係わって製作集団が配置されていたともみられる。

最後になりましたが、炭焼窯跡の年代測定に協力いただきました秋田大学鉱山学部西谷忠師先生、炭焼窯跡についてご教示いただきました財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所関清氏、富山県埋蔵文化財センター斎藤隆氏に記して感謝いたします。

表 1

	遺跡名	位置	様式	長さ	最大幅	傾斜	窯尻形	時代	備考
炭焼窯	大平遺跡１号	秋田市	半地下式	7.6	1.0	19°	円弧状		煙道は窯尻につく
	大平遺跡２号	秋田市	半地下式	5.2	0.9	19°	円弧状		煙道は窯尻につく
	湯ノ沢Ｄ遺跡	秋田市	半地下式	7.0	2.45	6°－15°	円弧状		煙道は窯尻と左右両側につく
	坂の上Ｅ遺跡	秋田市	地下式	6.5	1.3		四角状	9C～10C	煙道は横につく
	十二林遺跡	能代市	地下式	7.0	1.35	8°	四角状	10C前半	煙道は横につく
須恵器窯	末館遺跡	雄物川町	半地下式	8.55	1.6	25°	円弧状	8C中葉	
	竹原遺跡SJ05	横手市	地下式		1.7			8C中～9C初	SJ07も同じ
	葛法窯跡	本荘市	半地下式	7.4	1.14	15°－34°	円弧状	8C後半～9C初	焚口から中程まで15°窯尻まで34°
	竹原窯跡SJ20	横手市	半地下式	11.6	1.2	25°	円弧状	8C後半	
	竹原窯跡SJ01	横手市	半地下式	7.45	1.3	14°－30°	円弧状	8C後半～9C初	焚口から中程まで14°窯尻まで30°
	手形山窯跡２	秋田市	半地下式	6.1	1.2	19°	四角状	8C末～9C初	
	成沢遺跡１号	大曲市	半地下式	5.1	1.2	22°	鋭角状	8C末～9C中葉	
	成沢遺跡２号	大曲市	半地下式			20°－30°		8C末～9C中葉	焚口から中程まで20°窯尻まで30°
	成沢遺跡３号	大曲市	半地下式	5.4	1.2	20°－35°	鋭角状	8C末～9C中葉	焚口から中程まで20°窯尻まで35°
	郷土館窯跡	横手市	半地下式	8.6	1.7	20°	鋭角状	9C前葉	
	手形山窯跡２	秋田市	半地下式	6.8	1.7	24°	四角状	9C中	
	物見窯跡	横手市	半地下式	2.2	1.2	0		9C後葉～10C前半	平窯である
	十二林遺跡	能代市	地下式	8.0	1.2	22°	四角状	10C初	

単位：m

参考資料

１横手郷土史編纂委員会『遺跡発掘調査報告－第三輯－』1963（昭和38年）
２杉渕　馨『物見窯址群－第一号窯址発掘調査略報－』1974（昭和49年）
３秋田県教育委員会『手形山窯跡』1974（昭和49年）
４秋田県教育委員会『成沢遺跡発掘調査報告書』1976（昭和51年）
５横手市教育委員会『郷土館窯跡』1976（昭和51年）
６本荘市教育委員会『葛法窯跡分布調査報告書』1978（昭和53年）
７本荘市『本荘市史－資料編上－』1984（昭和59年）
８秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係－埋蔵文化財発掘調査報告書－』1984（昭和59年）
９秋田県教育委員会『十二林遺跡他発掘調査報告書－秋文調報第178集－』1989（平成元年）
10秋田県教育委員会『竹原窯跡発掘調査報告書－秋文調報第209集－』1991（平成３年）
※ 秋文調報は秋田県文化財調査報告書の略

参考文献

1 秋田地所（有）秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』1978（昭和53年）

2 富山考古学会『大境－第9号－』1985（昭和60年）

富山県内の炭窯をまとめた関清氏から、古代の炭窯は床面斜度が大きいほど古く、時代が新しくなるにつれて小型化し、地下式から半地下式へ移行する等の教示を得た。しかしながら、現在のところ秋田県内の炭窯では、これらの傾向は確認できていない。

3 秋田県教育委員会　払田柵跡調査事務所『払田柵跡－政庁跡－』1985（昭和60年）

4 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　第1号　1986（昭和61年）

5 駒沢大学考古学研究室『東京・太陽の丘遺跡』1987（昭和62年）

6 秋田市教育委員会、秋田城跡調査事務所『秋田城跡発掘調査概報』1990（平成2年）

7 岩手県立博物館『北の鉄文化』1990（平成2年）

8 財団法人　のじぎく文化財保護研究財団（神戸市）『のじぎく文化財だより第31号』1994（平成6年）

報告書抄録

ふりがな	おおひら
書名	大平遺跡
副書名	秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第264集
編著者名	伊藤攻・庄内昭男
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014　秋田県仙北郡払田字牛嶋20番地　0187-69-3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒014　秋田県秋田市山王4丁目1番2号　0188-60-3139
発行年月日	1996年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおひら 大平遺跡	秋田県秋田市 金足岩瀬字 松館大平28－3外			39 51 20.625	140 2 27.368	19940511 ～ 19940624	1,300	開発事業 (道路関連)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平遺跡	生産関係 集落	奈良時代	住居跡　1軒 炭焼窯跡　2基 土坑　3基	土師器・須恵器 石器	

調査前遺跡全景（南西→北東）

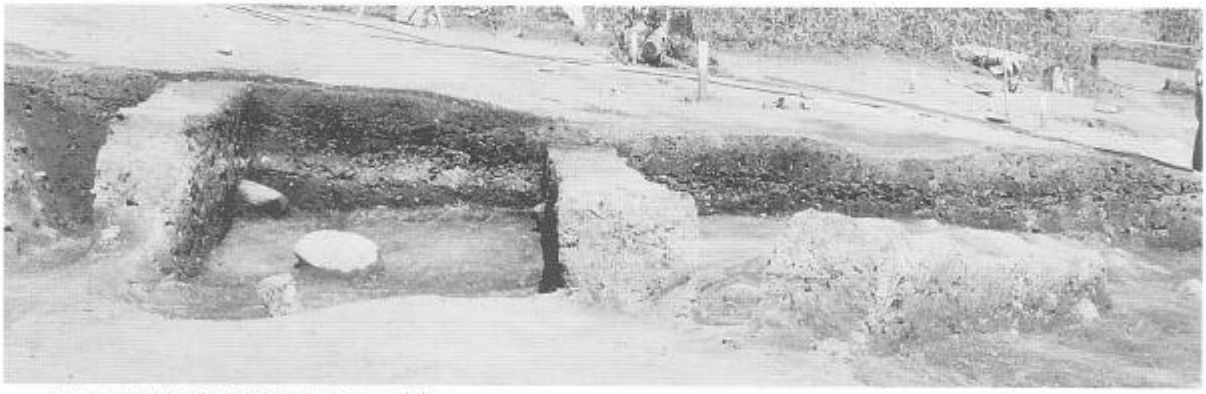
調査前遺跡全景（南→北）

図版 2

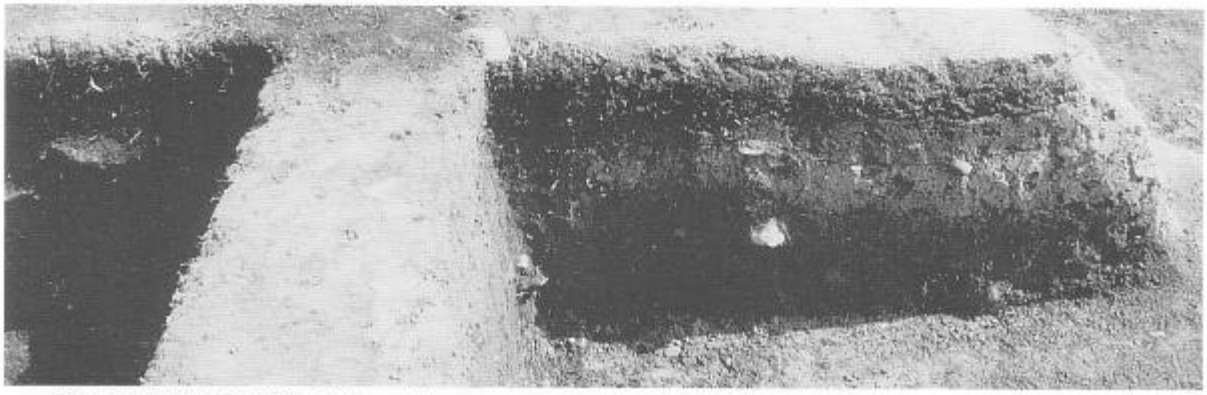
調査前の遺跡全景（南→北）

調査後の遺跡全景（東→西）

第１号竪穴住居跡完掘状況（上→　）



第１号竪穴住居跡断面（西→東）

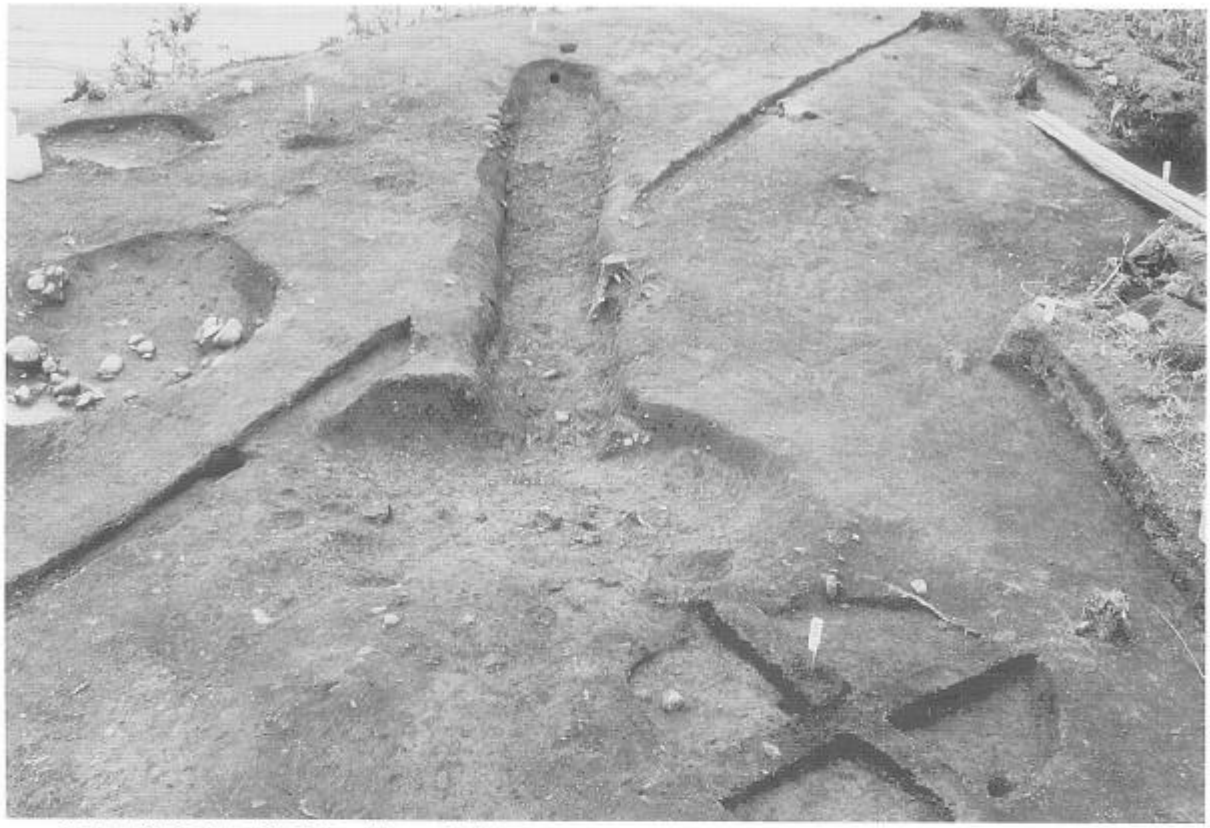


第１号竪穴住居跡断面（北→南）

第１号竪穴住居跡（西→東）

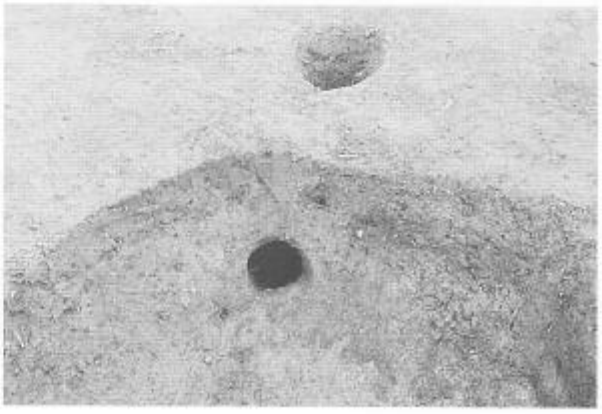
第１号竪穴住居跡
遺物出土状況（南→北）

須恵器出土状況



第１号炭焼窯跡完掘状況（南西→北東）

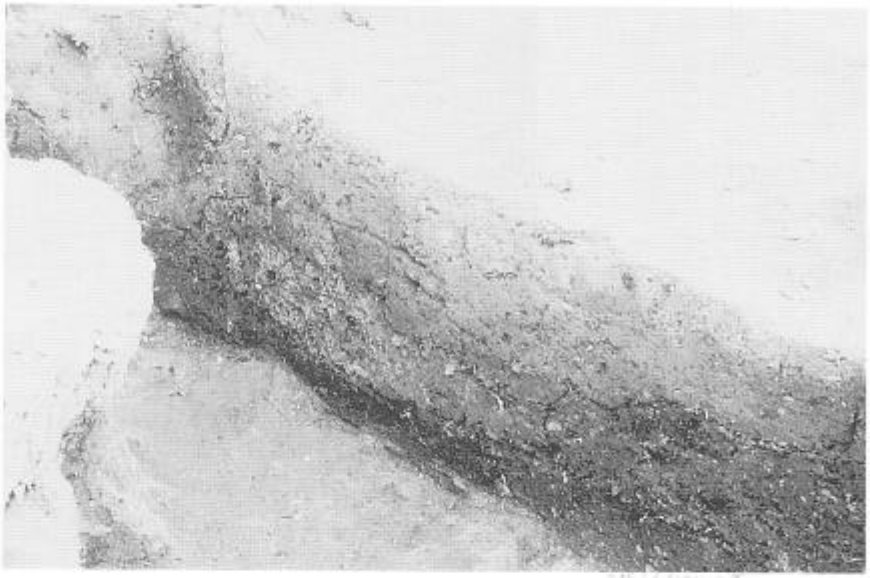
←第１号炭焼窯跡焚口付近



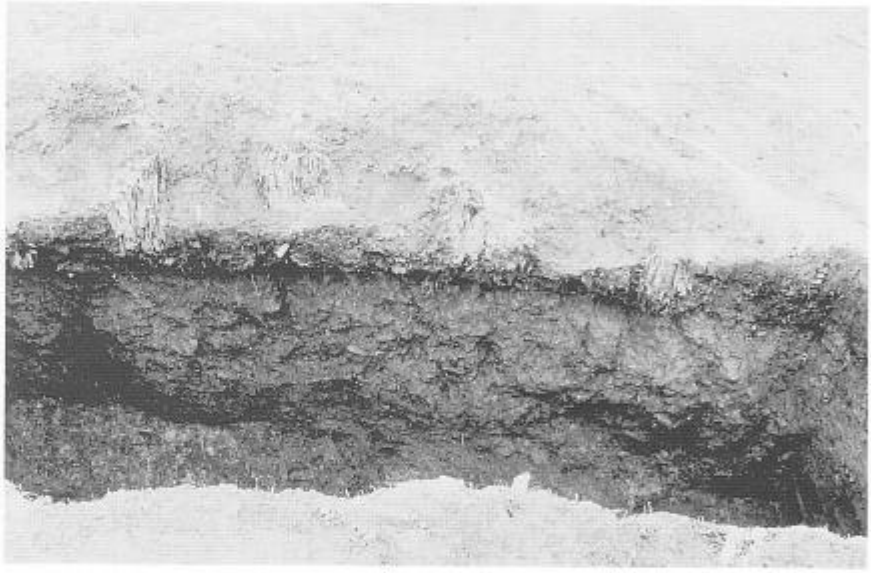
第１号炭焼窯跡煙出し付近→

第２号炭焼窯跡完掘状況（南東→北西）

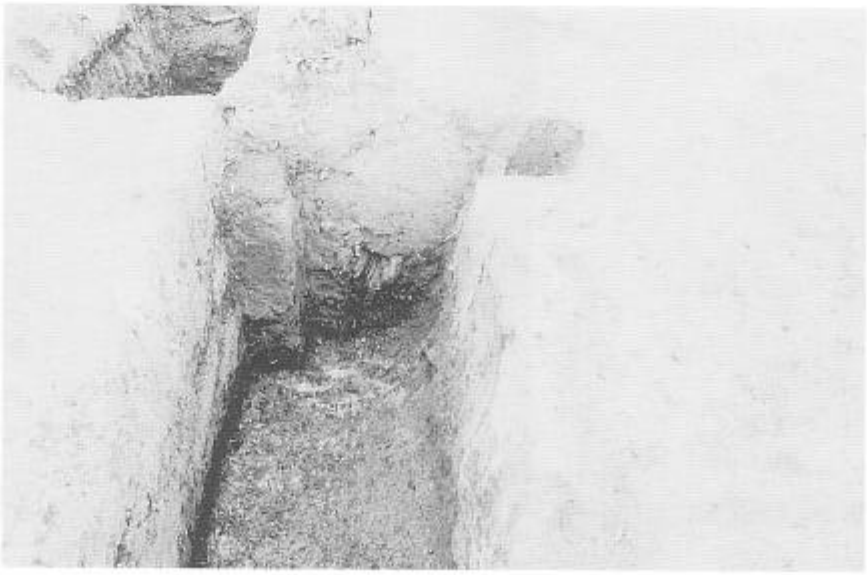
第２号炭焼窯跡炭化材出土状況（北東→南西）



第2号炭焼窯跡焚口付近縦断面
（南西→北東）



第2号炭焼窯跡窯体中央部縦断面
（南西→北東）

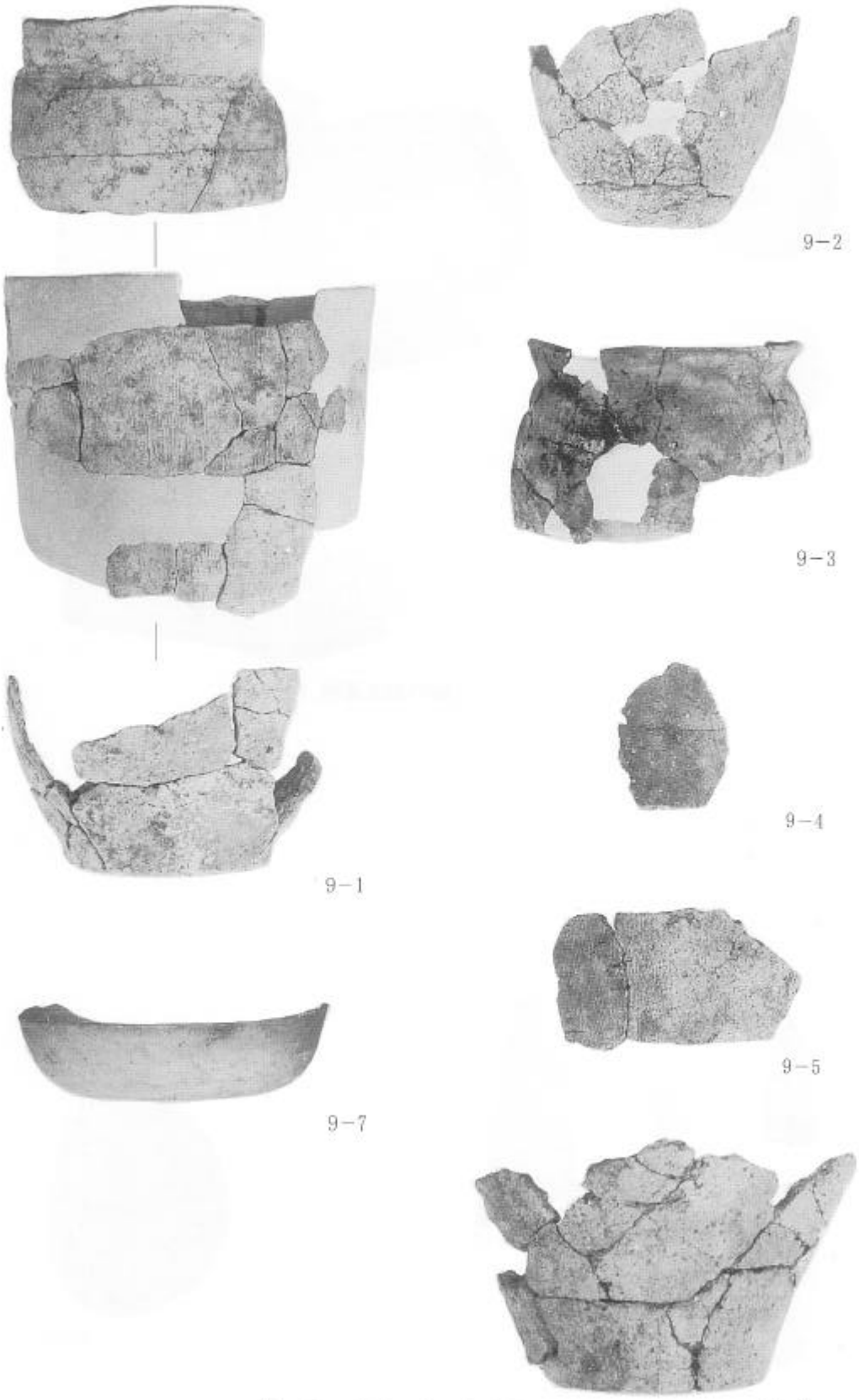


第2号炭焼窯跡窯体中央部横断面
（南東→北西）

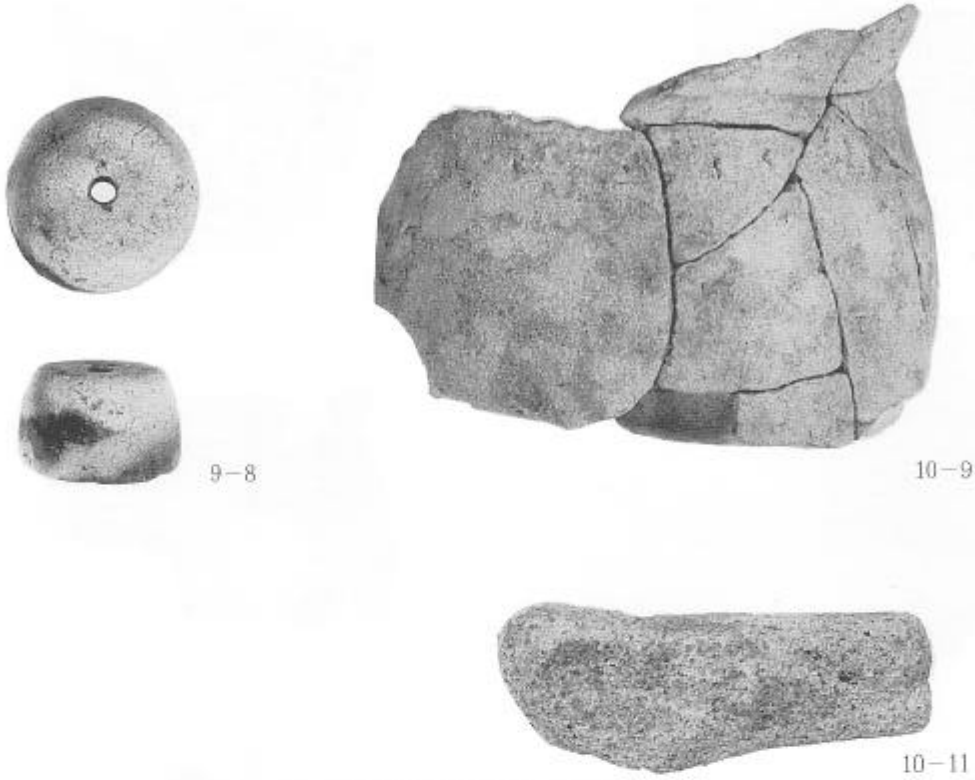
第1号土坑完掘状況（南→北）

第2号土坑完掘状況（南→北）

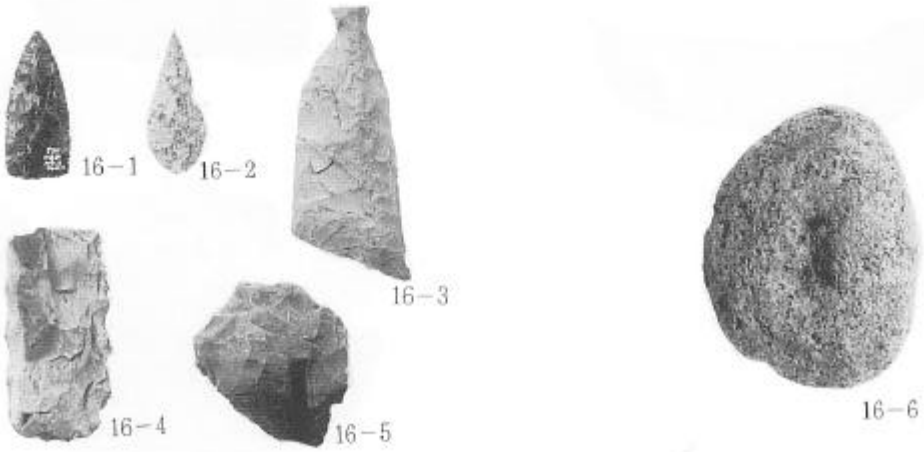
第3号土坑完掘状況（南→北）



第１号竪穴住居跡内出土遺物（１）



第１号竪穴住居跡内出土遺物（２）



遺構外出土石器